福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

シナリオ　大志の果て　：　日下部太郎・グリフィス

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂手, 一成 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00029086

シナリオ

『大志の果て』

日下部太郎・グリフィス

		◇シーン・プロット◇	
1	福井市立図書館横・記念碑		
2	福井藩城下・八幡宮		
3	同境内	F・I	
4	城下・足羽川河畔		
5	同・中州		
6	同・岸辺		
7	同・中州		
8	同・岸辺	F・O	
9	八木郡右衛門宅・縁側に面した居間		
10	城下・錬武所		
11	同・道場内		
12	藩校「明道館」・外塾		
13	同・学事掛の部屋		
14	明道館・講堂		
15	同・講義室		
16	江戸城・安政大獄	F・I	
17	江戸・小天馬町獄舎		
18	辞世・朗詠	F・O	

19 福井城・御本丸橋

20 城内三之丸・明道館への道

21 明道館・講堂

22 城内・三之丸橋

23 郡右衛門宅・おくまの居間

24 同・廊下

25 同・おくまの居間

26 同・八十八の居間

27 ナレーション1（長崎留学）

28 郡右衛門宅・中庭

29 同・座敷

30 城下足羽川河畔・船着き場

31 同・堤の茶屋

32 同・奥の間

33 足羽川・川面

34 同・堤

35 長崎・市街地

36 長崎・済美館

37 同・寄宿舎二階の部屋

38 同・大講義室
39 同・窓外
40 同・大教室
41 同・小教室
42 同・寄宿舎の部屋
43 南山手・外人居留地
44 同・坂道
45 同・洋館前
46 眼鏡橋
47 同・付近の川辺

・大浦天主堂の教会近くの路傍

48 済美館・校長室
49 崇福寺・境内
50 同・開山堂　O・L
51 ナレーション2（決意・帰郷）
52 郡右衛門の居間
53 ナレーション3（長崎第四号・渡米）
54 長崎湾　F・I
55 ニューブランズウイック市（俯瞰）O・L
56 ナレーション4（グリフィスとの出会い）

57 グリフィス家のテラス
58 ラトガース大学・正門
59 同・構内
60 同・小教室
61 同・図書館・閲覧室
62 同・生物学講義室
63 同・化学実験室
64 同・図書館閲覧室
65 市街地・カフェテラス
66 市街地の公園・噴水前
67 同・噴水前のベンチ
68 下宿先の部屋
69 ラリタン川に架かる橋の上
70 大学食堂
71 下宿先の部屋・深夜
72 同・夜明け
73 大学図書館・閲覧室
74 ニューブランズウイックの病院
75 同・個室
76 同・病棟廊下

77 同・個室

78 同・病棟医務室

79 同・玄関口

80 同・個室

81 ウイローグローブ・セミタリ　F・O

82 大学構内

83 付属校・校長室

84 市街地・カフェテラス

サブタイトル

85 大学図書館・閲覧室

86 グリフィスの部屋

87 ウイローグローブセミタリ

88 市街地・教会

89 大平原を行く列車　F・I

90 渓谷を行く列車

91 同・列車内

92 サンフランシスコ市街

93 サブタイトル　出航

94 船室・個室

95 甲板
96 同・甲板
97 サブタイトル 横浜入港
98 福井藩江戸屋敷・広間
99 福井への道中
100 府中・旅籠の部屋
101 同・大広間
102 同・旅籠前
103 福井城下・近郊の街道
104 グリフィスの執務室

104 サブタイトル 授業開始
106 明新館・教場
107 同・教場 磁石
108 同・教場 歴史
109 グリフィスの宿舎
110 城下・足羽川の川原
111 同・川原の堤
112 グリフィスの宿舎
113 明新館・玄関前
114 武家屋敷の道

115 ナレーション5（　　置県）
116 城内本丸・大広間
117 グリフィスの執務室
118 サブタイトル　最後の授業
119 明新館・教場
120 同・校門前　F・O
121 福井駅頭
122 瑞龍寺前通り街道
123 福井中学校・講堂
124 姉妹都市盟約書（インサート）
125 福井市役所・応接室
126 クレジット・タイトル
127 「堕涙碑」　完

『大志の果て』・梗概

福井市立図書館の脇に立つ一つの記念碑。日下部太郎とW・Eグリフィスの胸像のレリーフ「堕涙碑」である。

弘化二年（一八四五）六月六日、福井藩御先物頭、八木郡右衛門の長男として生まれた八十八は、実直で厳格な父と慈しみ深い母の元、快活で利発な、それに何よりも好学の少年に育っていった。

時恰も激動の幕末、安政の大獄で藩の青年武士達のよき先輩、よき師として敬愛されていた橋本左内もその犠牲となる。

「苦冤洗い難く、恨み禁じ難し…」父からその志の深さを諭された八十八は、いよいよ学問に励んでいく。

藩校「明道館」に学んで七年、二十歳になった八十八に、長崎「済美館」での英学修学の藩命が下る。

尊敬する矢島明道館幹事や三岡八郎（由利

（乙）

公正）に励まされ、志も新たに長崎に向かった八十八は、そこで、藩と所縁も深い熊本藩の横井小楠の甥、伊勢左太郎（横井左平次）、沼川三郎（横井太平）の兄弟に出会う。兄弟も留学中であったが、密航を企て渡米する。

長崎留学は、八十八の向学心をいっそう奮い立たせる事となった。

両親にアメリカ留学の決意を打ち明けた八十八は、慶応三年（一八六七）二月、藩最初の海外留学生として勇躍長崎を船出して行く。

八木八十八改め、日下部太郎二十三歳の旅立ちであった。

合衆国ニューブランズウィック市にある伝統校ラトガース大学付属グラマースクールに入学した太郎は、そこで奇遇にも、沼川三郎に再会する。ここでも勤勉ぶりを発揮した太郎は、わずか一年で大学二年編入を果たすのであった。そうした太郎の師として、また友として、常に温かく接してくれた二歳年上の青年こそ、グリフィスその人であった。

大学で太郎は、理学を専攻、日夜を分かたぬ精進の日々は続いた。当時の合衆国は、物価も高く、生活は苦渋を極めた。

本国で、年号が明治と改まったそんな折、太郎の元に父からの便りが届く。それは、廃籍奉還で職を失し、加えて次郎、三郎と相次いで息子を病いで失い、その母も病床と、すっかり気弱になった郡右衛門が、太郎の一日も早い帰国を促す便りであった。

しかし、卒業まで後一年、学問の実を上げて帰国する事こそが…と、心で詫びつつ、さらに己に鞭打つ太郎であった。

粗食に耐え、連日未明に及んだ勉学。無理が重なりとうとう吐血する。恐るべき結核であった。病魔と闘いながら尚も志を追い求める太郎であったが、卒業を後三カ月にして、一八七〇年四月二十三日、異国の地で不帰の人となってしまう。

大学は、太郎の真摯な人柄と直向きな努力を高く評価し、卒業を認定するとともに、最

高の栄誉であるファイ・ベータ・カッパー賞の「金の鍵」を与えたのであった。

一方、大学卒業後神学校に学び牧師として充実した日々を過ごしていたグリフィスは、ある日恩師ライリー校長から日本で自然科学の知識や技術を教える事を勧められる。それは、奇しくも福井藩からの招聘であった。熟慮の後、これも牧師としての使命であると思い至ったグリフィスはこの招きに応じる。

明治四年（一八七一）三月四日、長旅の末福井に着いたグフィは、藩知事松平茂昭との接見を終えると、太郎の父を宿舎に迎えた。グリフィスは、太郎の彼の地での様子を真心込めて伝え、栄誉の「金の鍵」を郡右衛門の手にしっかりと握らせるのであった。

生命燃えつきるまでその志を希求し、空しくも異国に逝ったその人は、こうして故郷に戻ってきたのであった。

翌日からグリフィスの授業は開始された。熱心で工夫された授業、それにその誠実な人

柄は、門弟や藩校関係者の信頼と敬愛を一身に集め、成果も目に見えて上がって行った。

しかし、わずか十カ月後、廃藩置県の政令公布により、福井での生活は叶わなくなる。

由利公正やフルベッキー（元済美館校長）の勧めで上京を決意したグリフィスは、明治五年一月十日最後の授業を終え、惜しまれつつ福井を去って行く。

昭和元年（一九二六）十二月、日本政府の招きで勲三等旭日章の授与式に臨んだグリフィス夫妻は、翌年福井を訪れた。実に五十五年ぶりの春の事であった。そして、その日から五十幾年、更にあの昭和の時は流れ……

昭和五十七年五月二十七日、福井市とニューブランズウィック市は、日下部太郎とグリフィスの友情の絆を機縁に、姉妹都市盟約書を締結するところとなった。

それは、明治・大正・昭和と激動の一世紀を経てよみがえった心のかけ橋であった。

『大志の果て』

○福井市立図書館横・記念碑

碑には、「堕涙碑」を中央にして、右側に日下部太郎、対面にW・Eグリフィスの胸像レリフ。

○記念碑にダブッてメインタイトル

「大志の果て」

（F・I）

○福井藩城下・八幡宮

安政四年（一八五七）・初春

（サブタイトル）

欅の大鳥居。

石畳の真正面に拝殿、軒に真新しい注連飾り。

大屋根には、一尺余の根雪に僅かの新雪が積もっている。

○同境内

楠の大木を取り囲んで、数人の少年達。

根元から一丈程の枝に、武者絵の凧が掛かっている。

慎重に、枝を伝う八木八十八。

はらはらして見上げる榊原数馬達。

数馬「八十八。いいって、やめろって」

八十八「大丈夫。折角、弟に買ったんだろう。任せろ。今取ってやるから」

八十八、凧の掛かっている枝にたどり着き、凧を外し投げ出すと、掛け声諸共、雪中に飛び降りる。

駆け寄る数馬達を莞爾として制し、袴の雪を払い立ち上がる。

○城下・足羽川河畔

中州に分断された流れ。

岸に向かって水面に幾つもの渦を作りながら、ゆったりと流れている。

○同　中州

汀の川柳に紅白の布切れが結び付けられている。

流れの中程、八十八と数馬が抜き手を切って泳いでいく。

○同　岸辺

赤銅色に日焼けした少年達が声をからして叫んでいる。

少年一「や、そ、は、ちー。追い越せえ」

少年二「源氏だぞう。負けるなあ。数馬」

○同　中州

泳ぎ切った数馬。

川柳の白布を掴み取ると、岸に向かって飛び込む。

一瞬遅れて、中州に駆け上がる八十八。

真っ白の褌に赤布を差し込み水中へ。

川の中程で頭を出すと数馬と並ぶ。

再び潜る八十八。

○同　岸辺

先に岸に泳ぎ着き、白布を振って勝鬨をあげる数馬。

潜ったままの八十八。

不安気な少年達。

岸辺の汀に勢いよく浮かび上がる八十八

両手に大きな鯉を抱えている。

やんやと囃す少年達。

（F・O）

○八木郡右衛門宅・縁側に面した居間

手入れの行き届いた庭。

薄く色づいた木々が茜に染んでいる。

父、郡右衛門と対座して八十八。

郡右衛門「八十八、明道館の左内先生、こたび又江戸へ御出府の事存じおるか」

八十八「はい、お聞き致しております。が、いつお戻りになるのでしょうか。私もいつか明道館にこ、ご教示をと念じておりましたのに……」

郡右衛門「うん、そうよのう。先生が帰省されて僅か一年。御同役の話では、殿様が常々申されている『文武、学政一致』を、更に新しきものにと、日夜、藩校の立直しに腐心されておられたとの事じゃが」

八十八「過日、先生が改めて著わされた『啓発録』、数馬の所で拝読しましたが、身の引き締まる思いが致しました」

郡右衛門「おお、『啓発録』のう。初稿は、先生御年十五歳の時じゃのう。『一つ、稚心を去る。一つ、気を振るう。一つ、志立てる。一つ、学を勉める。一つ、交友を択ぶ。』大阪の緒方先生の適塾に入門される前の年と聞いておるが……」

八十八「はい。そう承っております。で、父上この度のもの求めて頂けませんか。手元にて、再度熟読致しとう存じます」

郡右衛門「うん、相分かった。御番役の存じおりの方に願い、ようかの」

八十八「父上。是非願い致します」

郡右衛門「江戸の殿様も、国事一段と多事多難のご様子。先生の御出府も殿のたってのお達しと聞いておる。…其方等とて、心身の鍛練忘れまいぞ」

八十八「はい、父上」

縁側を小走りに来る足音。

弟の次郎、縁に片膝ついて。

次郎「父上、兄上。夕げにございます。今夜は、毛矢の叔母上から頂戴した落ち鮎の田楽だそうです」

郡右衛門「これ次郎。落ち鮎は無かろう。秋鮎の田楽と申せ。…こりゃ楽しみじゃ」

八十八にっこりとして、次郎の肩に優しく手を添える。

○ 城下・錬武所

「新影流　横山藤八郎道場」の表札。

道場の軒には、つららが下がっている。

○ 同　道場内

兄弟子と対峙する八十八。吐く息が白い。中段から仕掛けるが、その都度小手を取られる。

高弟「八十八、小技に頼るな。姿勢だ。姿勢で攻めよ。目線を高くっ」

思い決した様に、上段から面一筋、敢然と竹刀を打ち下ろしていく八十八。

受けに回ってたじたじになる兄弟子。

高弟「よし、それまで。八十八、見事な気迫ぞ。その呼吸、忘れるなっ」

着座し、面を外す八十八。

その凛とした表情。

○藩校「明道館」・外塾

安政五年（一八五八）・早春

（サブタイトル）

教棟の軒場の片隅に梅の古木。

点々と紅色の花が咲いている。

穏やかな陽射しが、庭石の淡雪を照らしている。

○同・学事掛の部屋

緊張の面持ちで学事掛、原田市太夫と対座している郡右衛門。

原田「八木殿、わざわざのお呼び立て、恐縮に存じます」

郡右衛門「とんでもございません。それに本日は非番のことゆえ、午後は、久しぶりに道場にて一汗流そうものと……」

原田「郡右衛門ほどのお方にして……猶の鍛練……感じ入ります」

郡右衛門「いやいや、昨今は、気ばかりで体がついて参りません」

原田「ご謙遜を、折々師範代もお務めとか。折を見て、是非一度ご伝授の程……」

郡右衛門「いやいや、その様な事。……それより、本日は如何なる事にて……」

原田「そうでした。失礼致しました。実は、ご子息の事ですが」

郡右衛門「八十八の……で……」

原田「これは、かねがね伺ってはいたのですが、この度、明道館幹事矢島殿のご推挙もあり、藩校の方々のご同意も有って、ご子息当年十三歳なれど、この外塾に、入門の許可が……」

郡右衛門「えっ、明道館へ入門のお許し。八十八に。本当に八十八に。……まだ先の事と思いおりましたのに……」

原田「確かに、『士分の子弟十五歳なるを以て、これを許す。』と、定めはそうですが、左内先生も常々、『志、才有る者には、潔く、迅く門を開くべし。今はかく時世なり。』と仰せだったと承っております。……本当に羨ましき限りで、私などもその薫陶の方途など、ご教授頂きたいものです」

郡右衛門「とんでもございません。……いや、本当に有り難き事で、本人も喜びの限りと存じます」

原田「入門は、この卯月から、詳細は後日改

めて申し上げます」

郡右衛門「はい。何卒、何卒よしなにお願い申し上げます。八十八ごときが、年上の門弟の方に伍して行けよう筈はありませぬがせめて、ご迷惑に成らぬよう、暫時時も有りますれば、肝要な事などお教え賜りたく……」

原田「いやいや、ここでは、そうご案じなさらずとも……もっとも、三之丸の本校では三岡先生の強固な思いを、左内先生が藩の重役方や明道館の幹事の方に、幾度も懇諭されて、ご承知の様に洋書習学所、兵科局、砲科局といった新しい科が開設されたところです。が、なにせ余りの変わり様に、ご重役方も今も何かと戸惑っておられる様です」

郡右衛門「原田殿と違い、政の事などに疎い私ですが、黒船の来航以来、藩の仕置何故か慌ただしくなって参ったようで、……ところで、原田殿、左内先生の事で何か伺っ

ておられますか。華々しくお働きの事と拝察申し上げますが……」

原田「これは、藩庁の上役の方から漏れ承ったのですが、左内先生は、殿のお側近くに仕えられ、正に東奔西走京と江戸の間を往き来されているとの事です」

郡右衛門「そうですか。そんなにもご多忙の日々をお過ごしですか」

原田「ただ、国表の重役の方々には、事の成り行きが、今一つ定かならず、些か気を揉んでおられるとの事ですが」

○明道館・講堂

大広間。正面床の間には、墨痕鮮やかに「游於藝」の一幅。

文机を前に三、四十人程の新門弟が緊張した面持ちで、原田の講話に聞き入っている。

原田「……という訳で、ここでは、経書、歴史諸子、和学、算術、典礼などの規範につ

いて学んで貰う事となる。私は、経書、歴史諸子を担当する。猶、ここでの習熟顕著なる者は、三之丸校にて、蘭学など更に、新しき事に精進致す事と相成る。虚文を後にして、実行を先にす。只今からは、先ず以て稚心を去り、志を立て、学に励んで…」

あちこちで、隣席の者と私語を交わし始める門弟。

後列で、背筋を伸ばし聞き入る八十八。

〇同　講義室

二十人程の門弟、見台に書物を立て原田の講義を受けている。

十八史略の演習。

原田（朗々と）「天地に正気有り、雑然として流形に賦す」

復唱する門弟達。

原田「下は即ち河嶽と為り、上は即ち日月と為る」

続けて復唱する門弟。

原田「この五言古詩は、宗の文天祥の作で、古来『正気の歌』として、人々の膾炙するところである。さて、諸君に問う。第一句の正気とは、如何なる意か」

沈黙を破って、門弟の一人。

門弟一「ここでは、正義の事と存じます。」

原田「うん、正義か。大意としてはの。…しかし、それでは、第二句との関わりは如何相成る」

黙読を止めて、沈着に答える八十八。

八十八「私は、天地に、目に見えず有る。大法いわば、節理の意と感じました」

原田「うん、天地の間に厳然として存する、大本の気じゃの。人間の小賢しき思いや行為を超越して存するもの…」

門弟一「分かりました。第二句では、それが森羅万象いろいろの形状を成して、この世に配されている。…と、述べられているのだと存じます」

原田「そうじゃ。そして、最後の一句、時に窮して節乃ち見（あら）わる。と結んでいる。人間窮地に至って、その人物の真意、真価が分かる。という事じゃの」

八十八「左内先生や長州の吉田松陰先生、水戸の藤田東湖先生も事あるごとに諭されてとか、父から聞いております」

原田「正に然り、刻々と変じて止まぬ昨今、その行く末を過たぬためにも、事に処するに、如何に正気に則るや、只今の一大事と言えようかの」

（F・I）

○江戸城（ダブらせて、以下のサブタイトル流れる）

安政五年（一八五八）

七月五日　松平慶永　隠居、急度慎を命じらる。

同二十二日　橋本左内　江戸町奉行所にて訊問を受く。即日謹慎。

九月七日　梅田雲浜　捕縛さる。

頼三樹三郎・吉田松陰　捕縛さる。

安政六年（一八五九）

七月三日　橋本左内　評定所にて五度目の訊問を受く。

九月十四日　梅田雲浜　獄死。

十月二日　橋本左内　入獄。

同　七日　橋本左内・頼三樹三郎等処刑さる。

○江戸・小天馬町獄舎

牢の潜り戸を出る橋本左内。

牢格子前の石畳に正座し、（藩邸の方角に）向きを変え、両手をつき深々と頭を下げる。

獄史「橋本殿。…これは、…春嶽公より賜りました物にございます」

純白の装束、押し戴く左内。無言。

○　同　刑場

筆墨を引き寄せ、左手に有る巻紙に滞る
ことなく筆を運ぶ左内。
両手を膝に、穏やかに目を閉じている。
（その容姿が大写しされると）
両眼から、一条、二条涙が頬を伝っていく。（ダブらせて、サブタイトルで辞世漢詩が流れる。）
（朗詠）
苦冤洗ぎ難く恨み禁じ難し
俯しては悲傷し仰いでは吟ず
昨夜城中霜始めて隕つ
誰か知らん松柏後に凋む心を
二十六年夢の如く過ぎ
平昔を顧思すれば感滋多し
天祥の大節かつて心を折す
土室猶吟す正気の歌

続けて、春嶽公の一首を朗詠）

我を捨てて　いづ地に行けむ亡く数に

入りしと菊の　露の衣手

松平春嶽

（F・O）

○福井城・御本丸橋

深碧の水を満々と湛える堀。

橋の欄干に拳を押しつけ水面を見つめる八十八。

父の声「その時、先生は、涙されたそうじゃ。

余人は、それを武士からぬ仕儀と言い、未練と言う。八十八。父は、そうは断じて思わぬぞ。国への思い、殿やお家への思いもあろう。ご家族への思いもあろう。しかし私は、あの時左内殿は、己の志を惜しむ、己の志の今絶たるる事を恨む、心の芯からの涙を漏らされたと…そう信じておる」

反り立つ石垣、城壁の上は、どこまでも高く澄み切った秋空。

○城内三之丸・明道館への道

万延元年（一八五九）（サブタイトル）

早朝。学友と肩を並べ城内の小路を行く

八十八。

路傍は、爛漫の桜木。

○明道館・教場

教卓の地球儀を十数人の門弟が、代わる代わる触れている。

折々、説明を加えている教導の平沢貢。

平沢「よおし、各々席に着いて。…今、諸君に、球体地図を実際に指で触れながら、近隣の国、…更には、オランダ、エゲレス、メリケンなどの所在を概観してもろうたが、その感懐を聞かせてほしい。」

八十八他、二、三人の門弟が即座に挙手している。

平沢「よし。順に聞こうか。…おお、長井君か。先月の錬武所の春季大会。五人抜き

は…見事やったの。特に胴が冴えていたの。その内一度、お手合わせ願おうかの…で、君の感想は」

長井「はい。あんなにも遠く離れているオランダやエゲレス、フランスが遙か東洋の清国へ、いや我が国までにも、足繁く渡来する事に驚きを感じます」

佐野「同感です。私は、それとその異国の船を是非この目で確かめたく思いました。その巨大な事、いつぞや、三国の港で見た北前の千石船の比では無いと聞いております」

平沢「うん。船は長さ四十間。水面からの高さ五間と聞いておるから、この教場の大屋根より高いと言う事になる。それが、鉄でできておる」

天井を見上げる者。教場の前から後ろまで目測する者、興味津々の様子。

平沢「実は、我が藩でも昨年、洋式の帆船、『一番丸』が建造されておる。知っておる

ったか」

門弟達「……」

平沢「黒船来航の折、藩命で伊豆韮山の江川塾におられた三岡先生と浦賀で洋式船を研究しておられた佐々木先生お二方のご尽力でじゃ。尤も、藩としても、大野藩に先を越されておったからの」

八十八、再度挙手をして立ち上がる。

平沢「おう。君は、この春外塾から入門の……八木君だったの」

八十八「はい。私は、我国は（一瞬ためらい）実は、広い国なのだと思い至りました」

平沢「何と。狭い、小さい国でのうて、広い国と。うん。聞こう」

八十八「確かに、地図上は、想像以上に狭く感じました。しかし、我が国の周囲は全て海です。海洋国です。全国津々浦々に、良い港が有ります。もし、この先、長崎や横浜、浦賀の様に開港される事にでもなれば、この越前の三国からだって、朝

鮮、清国、ロシヤ、琉球を経てシャムにだって行けます。つまり、我が国は、国土の至る所が諸外国への玄関口だと存じます」

平沢「我が国は広いか。おもしろい。まるで三岡先生の言い様じゃ。ところで、先、長井君も言ったが、今我が国は外国の脅威に晒されている。これを取り除くには、先ず外国と対等に話ができなければならん。外国の国情に無知ではならん」

真剣な表情で聞き入る門弟達。

口調に熱を帯びてくる平沢。

平沢「そのためには、オランダ語やエゲレス語など外国の言葉を習得せねばならん。言葉を通してその国の歴史や事情が分かり、初めて色々の知識や技術が得られるからじゃ。…世の中に実際に役立つ学問の習得。左内先生が希求して止まなかったものを諸君は、今から一つ一つ学ぼうとしておるのだ。心してほしい」

大きく頷く門弟達。

満足げに門弟を見回す平沢教導。

○　城内・三之丸橋

長井、佐野ら数人と橋を来る八十八。

長井「八木君。我々は、今から足羽茶屋へ行く。木の芽田楽だ。どうだ君も一緒に」

八十八「有り難うございます。折角のお誘いですが、このところ母が臥せっており、今から薬種問屋へ…」

佐野「それは残念。長井の海防論と君の開国論を拝聴しようと楽しみだったのに」

長井「君の様な頼もしい後輩と、一度ゆっくりと思ったが、じゃ、次回という事で。母上をお大事に」

八十八「はい。有り難うございます」

橋を渡り終えたところで

八十八「では、ここで失礼いたします」

八十八、一礼すると長井達と別れ、商家の家並みの方へ。

○郡右衛門宅・おくまの居間

母（おくま）が、寝床に臥せっている。

障子の外に人影。

○同　廊下

八十八、膝をつき廊下から遠慮気味に声をかける。

八十八「母上、八十八只今もどりました。お休みでしょうか」

おくま「八十八ですか。お入りなさい」

八十八「いいえ。お目覚めでしたら、お申しつけの薬、求めて参りましたので、早速煎じて参りますが…」

おくま「そうですね。いただきましょう。お陰で随分と良くなりました。この分ですと明後日にも、床上げ叶いそうです。そうそう。お香代も夕刻までには、法事から戻ると言うておりましたから、他の事はいいですよ」

○同　おくまの居間

煎じた薬を急須にから茶碗に注いで、母に手渡している八十八。

息を吹きかけながら口に運ぶおくま。

八十八「加減は如何でしょうか。熱くありませんか。（わざと改まった口調で）本来ならお毒見致すべきところですが、苦手の薬の事ゆえ、ご遠慮仕りました…」

おくま「まあ。おもしろい事を。…それはそうと、明道館のほうはどうですか。難渋している事は有りませんか。年上の門弟方も親しくして下さいますか」

薬を幾度となく分けて口にするおくま。

八十八「ご安心下さい。ご教授いただく事全てが新鮮で、楽しく興味が尽きません」

おくま「そうですか。それは、なによりです」

八十八「今日は、先輩の方から、足羽茶屋の田楽に誘われました」

おくま「まあ。木の芽田楽ですって。八十八の

大好物の。…で…ああ、私のために食べ損ねた訳ですね。はい。承知いたしました。作って差し上げますよ」

○同　八十八の居間

灯下、文机に向かい一心に筆を滑らせる八十八。

書き写された横文字の綴りが重ねられていく。

仰向けになり、天井を見上げているが、やがて体を起こし再び机に向かう。

半紙に何かしたためている。半紙には、

『楽しみは　志もちてひたぶるに
　　新しき事に　また出会う時
　　八十八』

の一首が読み取れる。

○（雲間から漏れる暁光。滔々たる河の流れにダブらせて、次のナレーション）

刻々と迫る新しい日本の夜明け。その激

しくも、大きな潮流は、八十八をそのまま郷里には留めなかった。明道館に学ぶこと七年。二十一歳の有為な青年に成長した八十八は、藩命を受け長崎の幕府洋校「済美館」に留学する事となった。慶応元年（一八六五）、九月の事であった。

○郡右衛門宅・中庭

苔むした庭石に萩が咲き乱れ、板塀越しに、彩り始めた足羽の山が暮色の中に迫っている。

○同　座敷

宴の席。床の間正面に矢島明道館幹事、両脇に郡右衛門と八十八。居並ぶ縁者。

矢島「八十八君。この度はおめでとう。父上をはじめ御親族の方々、お慶びの程拝察申し上げます」

郡右衛門「矢島殿。お陰をもちまして長崎留学などと、又となき機会を与えて頂き、これ

一重に爾来の御教示のお陰と、唯々厚く御礼申し上げます」

矢島「いやいや。これも八十八君の、精進の為すところです。ただ八十八君。長崎には、各藩の俊英が集う事になります。藩の期待に応うる事もさりながら、私は八十八君。君は君自身の志とこそ競い、励んで欲しいものと願っております」

八十八「はい。先生のお言葉肝に銘じて参ります。…ところで、矢島先生。藩の長崎蔵屋敷には、しばしば三岡先生がお見えになると伺いましたが…」

矢島「確かに、藩の御用向きの事での…いや只今は、事情が有り、身を引いておられるが…」

八十八「身を引いておられる…」

郡右衛門「これ八十八。その様な立ち入った事、失礼じゃぞ」

矢島「いや。詳細は申せませぬが、時は、必ず先生を必要としてまいります」

郡右衛門、話題を遮るように銚子を取り、

郡右衛門「矢島殿。さあさあ一献。……先程よりのご懇篤なる励ましの数々……」

矢島「本人を前に些か面映ゆうござるが、八十八君の精励振りは、門弟の範たるものでした。それに、私が以て感じ入る事は、全てに直向きで、謙虚なその姿勢です」

おくま「か様な未熟の者に、重ね重ねの過分なお言葉、唯々恐縮致します」

綏江「兄上。矢島様は、藩でも指折りの仕舞いの上手と伺っております。是非兄上から一差しお願い申し上げて下さい」

郡右衛門「これっ綏江。その様な失礼な事を……」

矢島「いや。お気遣い無用です。私などより郡右衛門殿の謡いこそ轟いております。何卒御披露下さい。もし叶うなら、私も拙い仕舞いの一差しを」

郡右衛門「それは、それは。……では、小謡いから『千手』のひと節を」

矢島「ほほう。『千手』。正にこの家の方々

いの上手と伺っております。是非兄上から一差しお願い申し上げて下さい」

郡右衛門「これっ綏江。その様な失礼な事を……」

矢島「いや。お気遣い無用です。私などより郡右衛門殿の謡いこそ森いております。何卒御披露下さい。もし叶うなら、私も拙い仕舞いの一差しを」

郡右衛門「それは、それは。…………では、小謡いから『加茂』のひと節を」

矢島「ほほう。『加茂』。正にこの家の方々の心音。では、お願い致します」

座を立ち、次の間の中央で泰然として白扇を構える矢島。

『年の矢の早くも過ぐる光陰をしみても
かへらぬはもとの水　流れはよもつきじ
絶えせぬぞ手向けなりける……』

郡右衛門の謡いに乗じ、静々と仕舞いの歩を運ぶ矢島。

○城下足羽川河畔・船着き場

の心音。では、お願い致します」

座を立ち、次の間の中央で泰然として白扇を構える矢島。

『げにや東の果てしまで　人の心の奥深き　その情けこそ都なれ　花の春紅葉の秋　誰か思ひ出となりぬらん。』

郡右衛門の謡いに乗じ、静々と仕舞いの歩を運ぶ矢島。

○城下足羽川河畔・船着き場

幾隻もの伝馬船が着いている。

荷の積み下ろしでごったがえしている。

○同　堤の茶屋

片隅に旅支度の八十八。盛り蕎麦を食べている。他にも数人の客。

縄暖簾を分けて浪人風の武士。

三岡八郎（由利公正）が入って来る。

手には釣竿と濡れた魚籠。

亭主「いっしゃいませ。…これは、三岡様」

三岡「しいっ。大きな声をだすな。未だ謹慎の身ぞ。…尤も、久しくおとなしうしておった故、目付け殿も少々お目こぼしでの。ほれ、こうして釣りぐらいわの」

亭主「そうでしたか。それで安堵いたしました。ほんに、ようございました」

三岡「そうじゃ。親父。笊を持ってこい。今朝は思わぬ大漁での、鮒が十五匹、鯰が二匹、うぐい九匹よ。こりゃ、漁師にでもなろうかの」

亭主「また、ご冗談を…」

三岡「少し置いて参る」

亭主「滅相もない。お持ち帰りなさいませ。何でしたら、塩焼きにでもいたしておきましょうか」

三岡「儂のところは、母じゃと女房殿の三人知っておろうが。そんなに食えるか。つべこべ申さず早う笊か何か持って参れ。ついでに、冷やで二、三本な。つまみは沢庵殿で結構」

亭主「相分かりました。三岡様。どうぞ奥の座敷へ。さあ、さあ」

三岡「何、奥座敷。ここにそんな艶っぽいものあったかの」

亭主「またまた、お口の悪い」

○同　茶屋・奥の間

蓙を敷き、衝立で仕切られたひと間。

三岡の前に、八十八が畏まっている。

飯台の上には、三本の銚子と煮物、沢庵の入った小鉢。

三岡「そうか、君が八木君か。矢島さんから聞いておった。そうか、君が。…今から出立…そうか。よし、先ず一献。遠慮は無用じゃ」

八十八「いいえ、私は」

三岡「何を言っとるか。男児二十歳にして酒もやらんとは。全然飲めんのか」

八十八「はい。いいえ。時折、父の相伴で少々嗜んでおります」

三岡「うん、それで結構。さあ、いこう」
八十八「はい。頂戴いたします。（一気に飲み干して）ご返杯を」
三岡「おお、上々。…で、三国からは」
八十八「はい。富有丸という藩の船と伺っております」
三岡「ああ、米船ボーソン号のう。先年同じアメリカから買い付けたコムシン号、黒龍丸の事じゃが、これでは儂も一度長崎まで往復したが、船脚の速い中々の奴じゃった…懐かしいのう」
八十八「初めての船旅でいささか緊張しております」
三岡「なあに、海の荒れ様がきつくなるのはもっと後になってからよ。尤も玄界灘はかなりのもんじゃが…今日は、どうせ三国泊まり。どうだ、今宵の内に船酔い止めの呪いに、馴染みのところでも世話するかの」
八十八「はあ…」

三岡「男になって、新天地に乗り込むか」

八十八「男になって…」

三岡「分からんか。廓よ、廓」

八十八「いいえ、そんな…」

三岡「おうおう。話だけで赤面しよって、噂どおりの石部殿じゃ。…まあいいか。ところで八十八君。これは真面目な話だが、長崎留学大いに結構。しかし、それを全てと思い込まんでほしい。それを、即目的とせんでもらいたい」

八十八「はい」

三岡「異国語が少々読める、話せるだけではつまらんでのう。その事を新たな志への導火線にして欲しいのよ。分かるか」

八十八「はい。矢島先生も平沢教導も同意の事を仰いました」

三岡「うん。要は実際に役立つ学問を目指して欲しい」

八十八「実際に役に立つ学問…」

三岡「そうじゃ。実際に役立つとは、世の中

を変え、国を興し、民を安んじる、つまり、それらの事を実現する思想や技術、仕組みを学ぶ事じゃ。分かるか」

八十八「はい。学んだ事が、望ましい未来のために役立つ、またそうなるために学ぶという事だと思います」

三岡「そうだ。八木君。君は今、藩命によって長崎に留学せんとしているが、近い将来。藩だの、お家だのの仕切りを超えて国そのものが君達有為の青年を必要とする時がきっと来よう。…尤もそうなるには、私どもが、一汗も二汗もせねばならんがの。…八木君。私は君の壮途を心から是としたい。期待しておるぞ…」

八十八「先生。本当に有り難うございました。八木八十八、何よりの餞を頂戴いたしました」

飯台より離れ、両手をついて深々と頭を下げる八十八。

笑みを浮かべて見やる三岡。

○足羽川・川面

桟橋を離れる伝馬船。

船の艫に座して、堤に向かって黙礼を繰り返す八十八。

○同・堤

片手をかざし、何度も頷く三岡。

長崎・市街地

小高い丘の中腹から、入り江に向かって斜めに続く家並み。

○長崎・済美館

赤煉瓦作りの校門。

行書で太々と「済美館」の表札。

門内の木立ちの奥には数棟の洋風の建物が並んでいる。

○同　寄宿舎・二階の部屋

四畳半程の部屋。

すっかり整頓されている部屋。

窓を開け外を眺める八十八。

家並みの尽きる辺り海が光っている。

○同　大教室

五十人程の塾生を前に、講話をしている

柴田教授補。

若い塾生に混じって壮年の塾生。

柴田「…英語科には私の他に、平井、何、横山の各教授と英文典のリンネル先生がおられる。それに、仏語はジューリー先生独語は、校長のフルベッキ教授が担当されている。その他、世界歴史や数学、物理等の学科もあるが、諸君は、当分英語を第一義に励んでもらう事となる」

○同　窓外

教室の窓からは、明るい日差しの中、こんもり茂った森と教会の塔が見える。

澄んだ鐘の音が響いている。

○　同　大教室

話を続けている柴田。

柴田「…講義は、原則として辰の刻より午の刻までとし、その後未の刻までは、各自の質疑の時間に充てるものとする。…ここまでの事で質問は…」

最前列、左端の塾生立ち上がる。

塾生一「私達は、全て先生から教えていただくのでしょうか」

柴田「私と横山先生とで担当するが、今後の諸君の進度や習熟の度合いを勘案し、その速成を図るため、他の教授方にご支援いただく事もある…」

続いて中程に座している塾生が尋ねる。

塾生二「予め学習しておく、教本の様なものはあるのでしょうか」

柴田「勿論肝要なものについては用意する。ただ諸君の語学力は、今現に各々差異の

あるところで、一様には参らない。今後履修していく過程で、その都度対処していく事とする。…他に」

最前列、右端でメモを執っていた八十八一礼して質問する。

八十八「英語を学ぶ上で、特に心致すべき事をご教示下さい」

柴田「勿論、ここでの日々の研鑽が第一である。加えて、各自進んで…直の英語、生の英語に触れる様心がけて欲しい。

私も居留地の商館や領事館の書記官、通詞のところに足繁く通った記憶がある。習うより慣れろ、無責任に聞こえようが、これもまた真理と私は思う」

○同　小教室

英文が綴られた掛図を指して説明している柴田教授補。

挙手して、はっきり応答して八十八。

○同　寄宿舎の部屋

窓際の壁に、英語の文型らしきものを綴った半紙が数枚貼られている。

口誦しながら、往き来している八十八。

○南山手・外人居留地

石畳の坂道に沿ってモダンな洋館。

坂の行く手樹々の奥にナマコ壁の建物。

緑青の八角形の尖塔には十字架。

○同　坂道

外国の老婦人と身振り手振りで話合っている八十八。

時折、首を傾げながら微笑んで応じている老婦人。

○同　洋館前

外国の中年の夫婦らしきカップルに話かけている八十八。

夫　「イイエ。近イデス。タダ、道ガ曲ガッテイテ分カリニクイデス」

八十八　「Please draw a map here」

婦人　「ソレヨリ、一緒ニ来マセンカ。私達日曜ノ『ミサ』ニ行クトコロデシタ」

八十八　「May I go with you?」

婦人　「モチロンデス。日本人モ来テイマス」

八十八　「Thank you very much」

夫妻の後に従って行く八十八。

○大浦天主堂前

教会の石段を下りてくる八十八と先刻の中年夫妻。

夫　「ミサ　ドウデシタカ」

八十八　「はい、日本の信者が多く驚きました。神父様の言われる事、ところどころ理解できました」

婦人　「ソレハ、ヨカッタデス。…誘ッテヨカッタデス」

八十八　「それに、賛美歌、とても心に染みまし

た。初めて耳にした音…節でした」

夫「…語学ノタメモイイデスガ、是非一度聖書ヲ読ム事ヲオ勧メシマス。…簡潔ナ文章ノ中ニ、神ノ深イ御教エ、慈シミノ言葉ガギッシリ詰マッテイマス」

婦人「ソウデス。一度読ンデゴ覧ナサイ。商館ノ書籍部デ求メラレマスカラ…」

八十八「はい、…近い内に、求めてみたいと存じます。…いろいろと有り難うございました」

婦人「日曜ハ欠カサズ、ミサニ来テイマス。…Let's meet again Mr.nusakase」

八十八「Yes Mrs.Jerry good-bye」

夫妻が路地の木立ちに隠れるまで見送っている八十八。

○教会近くの路傍

突然近づいてきた二人の男に、何か尋問されている八十八。

懐中から取り出したメモ用紙や辞書を指

し示しながら、一心に説明している八十八。

やがて…歩き出す八十八。

その後ろ姿をしばし追っている二人。

○居留地・商館前

商館の入り口で立ち止まる八十八。

思い直して、通り過ぎる八十八。

○眼鏡橋

木々を離れた黄色の葉が、中島の川面を流れていく。

石の欄干にもたれ、洋書を繰っている八十八。近づいて来る二人の青年。

伊勢佐太郎（横井左平太）と沼川三郎（横井太平）の兄弟。

○同　付近の川辺

伊勢兄弟と川辺の薄の陰に腰を下ろし話こんでいる八十八。

八十八「そうでしたか。小楠先生の…。明道館の矢島幹事や平沢先生からよくお聞きしておりました。…本当に奇遇です」

伊勢「叔父は、三岡先生や福井での事を、それは嬉しそうに、大事に、何度も聞かせてくれました」

八十八「小楠先生は、春嶽公のご信頼厚く、先生の説かれた国是三論は、藩政の指針にもなっていると承知しております。で、今先生は…」

伊勢「それが、…一昨年帰藩して間もなく、以前からの、とかくの言行が、改めて吟味の事となり、今は、…知行召し上げの上、沼山津で蟄居を…」

八十八「えっ。知行召し上げ…蟄居。…三岡先生と言い、小楠先生と言い、…どうして志高き方々が、その様な不遇な、いや、理不尽な目に合われるのか。納得がいきません。残念です」

伊勢「『政は、往々にして事の善悪、正邪よ

り、それに携わる者の強弱に依りて決する事がある』…叔父がよく申しておりました…」

八十八「そうです。そう思います。…しかし、先生程の人です。必ずや、今一度…」

伊勢「はい。…そんな中で叔父は、『これからは、生きた学問、実学こそが藩を救う いや、国を興す』…そう言って私どもを熊本から送り出してくれました」

八十八「そうでしたか。…それにしても、同じ済美館に学びながら、今日までお会いしなかったとは…」

沼川「貴方と違って、兄と私は、寄宿舎でなく、叔父の知人宅に世話になっておりますから」

伊勢「それに、私どもは、主に、数学、物理を学んでおります」

沼川「兄も私も、いつか、航海学を学びたいと願っているのです」

八十八「航海学を。…それは、すばらしい事で

す。日本は海洋国。将来諸外国と伍して
いくためには、巨船の建造やその航行の
知識、技術は必需の事と存じます」
沼川「兄上、八木さんは、さすが三岡先生の
信奉者。思いが通じますね。…八木さん。
…実は私ども近々」
八十八「…何か」
伊勢「これっ、三郎。…いや、失礼。夢、私
どもの夢。…それより一度寄宿先に是非
お訪ね下さい。…大いに語りましょう」

八十八「有り難うございます。本当にお会いで
きてよかった。今後とも益々ご懇意に、
いや、色々とご教示下さい。…私の、小
楠先生として」
沼川「あれっ。八木さんは、お世辞学も修学
中でしたか…」
伊勢「これ、三郎」
土手の方へ駆け出す沼川。笑いながら続
く伊勢と八十八。
堤の彼方は染まる様な夕焼け。

○　済美館・校長室

執務中のフルベッキー校長。

窓ガラスの外、すっかり葉を落とした校庭の樹々に、ちらちらと粉雪らしいものが舞っている。　ノックの音。

フルベッキー「オ入リナサイ」

八十八「失礼いたします。…八木八十八参りました」

フルベッキー「サア、ソコヘオ座リナサイ。八木君ハ福井藩カラ来マシタネ。…ドウデスカ　ココ慣レマシタカ。困ル事ナイデスカ」

八十八「はい。毎日が満ち足りた気持ちでいっぱいです」

フルベッキー「オオ、ソレトテモ大切ナ事デス。不平、不満ノ心カラハ、ヨイ結果何モ生マレナイカラデス。…トコロデ、貴方ニ来テ貰ッタ訳二ツ有リマス」

八十八「はい…」

フルベッキー「貴方トテモ頑張ッテイマス。柴田先

生トテモ感心シテイマシタ。先週ノ英文典レポートモ、リンネ先生大変誉メテイマシタ。貴方ノ努力スバラシイデス」

八十八「校長先生直々のお言葉、光栄です。有り難うございます」

フルベッキー「今一ツ、貴方、橋本綱常君知ッテイマスネ。橋本左内……ノ……」

八十八「はい。お会いした事は有りませんが、勿論、存知あげております」

フルベッキー「彼、今ここにいるのです。『精得館』で医学を学んでいます」

八十八「そうですか。長崎にいらっしゃるのですか」

フルベッキー「彼ハ以前、私ノ所デ独語ヲ学ビマシタ。トテモ努力家デシタ。……将来ハ、ドイツ留学シテ、モット医学ヲ研究スル志モッテイマス。……八木君」

八十八「はい」

フルベッキー「君モ、語学ノ他ニ目的持ツ事勧メマス。貴方ニハ学ブ意欲アリマス。実行ス

ルカアリマス」

八十八「先生。フルベッキー校長先生。有リ難ウゴザイマス。…コレカラモ、厳シイゴ指導、オ願イ致シマス」

フルベッキー「イイデス。相談イツデモ来ナサイ。助言惜シミマセン」

丁寧に一礼して校長室を辞す八十八。

満足気に見送るフルベッキー。

校長室のドアを閉じて、再び一礼している八十八。怪訝そうに通り過ぎる塾生。

○崇福寺・境内

竜宮門を入る八十八。

中国風の伽藍、石畳の回廊。

回廊の柱の陰に断髪姿の伊勢。

伊勢「八木君…八木君…ここだ」

八十八、声の方角を見るが姿は発見できない。

八十八「伊勢さん…」

いきなり柱の陰に引き込まれる八十八。

八十八「伊勢さん。一体どうしたのですか…」

伊勢「しぃっ。…誰かに、尾行されている気配はなかったですか」

八十八「尾行、どうして。誰が…」

伊勢「大丈夫でしたか。…呼び出しておいてすみません」

八十八「尾行って、どういう事ですか」

伊勢「実は…このところ、多分、奉行所の者でしょうが、見張られている気がして」

八十八「…奉行所。どうして伊勢さん、貴方が何をしたというのです。…それに、その頭髪はどうしたのです」

伊勢「…もう少し、上へ行きましょう」

石段を巡り、第一峰門の柱に腰を下ろす二人。

八十八「一体どうしたと言うのです。話して下さい」

伊勢「実は…八木さん。弟と一緒に…外国へ行く事になりました。…アメリカです」

八十八「アメリカ…」

伊勢「この間…弟が言いかけたのはその事だったのです。叔父の知人で、商館の人ですが、手配りしてくれています」

八十八「…だとしても、今、まだ我が国では…渡航など…」

伊勢「そうです。…許されておりません。…それどころか、私の様な者が足繁く、商館や船に出入りするだけでも、その筋は目を光らせています」

八十八「…私も、先日、外国の方と一緒に教会から出てきたところ、奉行所の者とかいう人にいろいろ尋問されました。…尤も、語学の修練のためだと納得してくれた様ですが…」

伊勢「そうでしょう。…このところ、外国人との接触に、とにかく、ぴりぴりしています」

八十八「そんな時、無謀ですよ。伊勢さん」

伊勢「覚悟の上、いや、大丈夫です。…噂では、近々渡航の禁も解けるらしいのです

が、たとえそうなったとしても、叔父の事もあり、藩が許す筈がありません。今が私どもにとって機会なのです。乗船さえ果たせば、今の仕組みでは、藩も奉行所も手は出せないのです」

八十八「…で、アメリカへ渡ってどうするのですか…」

伊勢「その知人の話では、ニューヨーク近くのカレッジだそうです。勿論、彼の国の海洋学を学びます。…フルベッキー校長も陰でそれとなくお力添え下さったと聞いております」

八十八「そうでしたか。フルベッキー校長先生もご承知でしたか」

伊勢「向こうでは、働きながら学びます。…そうした事に寛容な国柄だそうです」

八十八「そうですか。そこまで決心されていたのですか。で、…いつ決行、いや、出航するのですか」

伊勢「ここ十日程の間になると思います。い

つ連絡があっても良いように、準備万端

静かに弟と、その時を待っています」

八十八「伊勢さん…」

伊勢「…この様な事、打ち明けたのは、貴方が叔父と縁のあった福井藩の人であり、いや、それ以上に、叔父の理想に共鳴された三岡先生を心酔して止まない貴方だからです」

八十八「伊勢さん」

伊勢「本来なら、一緒にお誘いしたいところです。…八木さん。貴方も貴方の志のためいつの日か、広く海外に雄飛して下さい。…期待しています」

八十八「伊勢さん。…うまくは言えませんが、私にも、何か熱いものが込み上げてきます。…伊勢さん。もう少し上まで登りましょう。…海が見たくなりました。世界に続く海です…」

○同　開山堂

堂の傍らには、薄紫の花をつけた木連の木立ち。

梢の彼方、銀色に輝く長崎の入り江。

肩を組み佇む二人。迫りくる暮色。

（〇、L）

○

（長崎港に停泊する幾隻もの洋船をダブらせて、次のナレーション）

海外渡航の禁止実に二百三十年余、ペリー来航から十三年、その禁は解かれる事となった。慶応二年（一八六六）四月、伊勢左太郎兄弟が密かに渡米して、わずかひと月後の事であった。

同年八月始め、八十八は、ある重大な決意を秘めて故郷福井へと戻って来た。

○

郡右衛門の居間

開け放たれた障子。

縁側の軒には風鈴が涼しげな音色を立てている。

床の間に『誠者天之道也　誠之者人之道

也』の一幅。長押に槍。

両親を前に両手をつき懇願する八十八。

八十八「父上。八十八、衷心よりお許し願いたき事がございます」

郡右衛門「うん。申してみよ」

八十八「父上。私に…海外に留学する事をお許し下さい」

おくま「これっ。八十八。…突然何を言い出すのです」

郡右衛門「構わぬ。続けよ、八十八」

八十八「はい。この事は、以前より思案致しておりましたが、この度の長崎行きで、固い決意となりました」

おくま「八十八、お前」

郡右衛門「これ、しばし黙っておれ。八十八順序立てて申せ」

八十八「父上もお感じの如く、黒船来航以来の国情、その混迷ぶりは目を覆うものがあります」

郡右衛門「…如何にも…で…」

八十八「その中で、私が一番強く思い至った事は、諸外国の国力でした。…と言って、ただ闇雲にそれを恐れるものではありません。国力と言っても、それは所詮、新しき学問、技術の差だと思うからです」

都右衛門「うん。…『器械技術は彼に採り、仁義忠孝は我に存す』…左内先生の申された事じゃ」

八十八「二百三十年に及ぶ鎖国策は、日本独自の伝統文化を育む一方、新しき学術の立ち後れを招いた事も否めません…」

都右衛門「…確かに」

八十八「それは恰も、雨戸の隙間から外界を覗く如くで、極端に申せばオランダという隙間から外国の文明を取り入れていたに過ぎません。…我国の文明の土台には、古く奈良、平安朝、鎌倉幕府の昔、隋、唐、宋などで留学生が学び、醸成して参ったものも多いと思います」

都右衛門「うん、道理じゃ」

八十八　「このままでは、諸外国との差はぐんぐん広がるばかりです。…ところで、父上もお聞き及びと存じますが、この四月に海外渡航の禁も解かれ、志ある藩は、競って留学生を派遣する準備を致しておるとの事でございます」

郡右衛門　「聞いておる。…我が藩も真剣に考慮しておるそうじゃ」

八十八　「父上、。私は…アメリカに参りたいと思っております。この国は独立して未だ百年にも満たぬ国です。が、それだけに人々は、新しい国作りに励んでいると聞いています。それに異国の人にも親切だそうです。色々の国から移り住んだ人々が力を合わせているからです」

郡右衛門　「…アメリカのう…」

八十八　「私はこの国で、これからの日本の為に真に役立つ、必要な知識や技術を学びたいのです。…三岡先生も私の長崎行きの折、実に、この事を仰いました。父上、

どうか、この願いをお聞き届け下さい。

…母上も…」

黙して聞き入る郡右衛門。

やがて…組んだ腕を解いて大きく頷く。

郡右衛門「八十八。相分かった。…早々に、藩庁に願い出てみい」

八十八「父上。有り難うございます。…母上」

おくま「父上が許されるのじゃ。私は何も…私はただ…お前が息災で…」

声を詰まらせ、涙ぐんでいるおくま。

郡右衛門「多分…お許しはあろう。…まことそうなった折は…八十八」

八十八「はい。父上」

郡右衛門「そち…名を改めよ」

八十八「えっ、姓名を」

郡右衛門「そうじゃ。…日下部、日下部は、ご先祖の姓。名は、…長男ゆえ、太郎、太郎じゃ」

八十八「日下部太郎。…父上…」

郡右衛門「うん、良い名じゃ。…日本でこそ、八

十八は米寿までもと目出度き名なれど、外国では、…ただの歳の数じゃでのう」嬉々として両親を見つめる八十八。

そっと目頭を押さえるおくま。

○（長崎港埠頭の情景にダブらせて、次のナレーション）

八木八十八改め日下部太郎が、福井藩最初の海外留学生として、米国留学の許可を得たのは九月の事であった。翌、慶応三年（一八六七）二月、幕府長崎外国事務局から、晴れて渡航免許状は交付された。この年四番目の海外渡航者、「長崎第四号」であった。

（F・I）

○長崎湾

大きく入り込んだ入り江。

群青の海原に、鮮やかな航跡を描いて進む船。

○　同　船上甲板

断髪、洋装の太郎。

甲板に立ち、遠ざかる陸地に目を凝らしている。

太郎の声「父上、母上、…太郎行って参ります。どうか…悲なくお過ごし下さい。矢島先生、三岡先生、フルベッキー校長先生…日下部太郎、志に向かって旅立つ事ができました。有り難うございました」

遙に稲佐山の稜線が霞んでいる。

拳を握り締め、唇を真一文字に立ち尽くす太郎。

（O・L）

○　ニューブランズウイック市（俯瞰）

緩やかに蛇行するラリタン川。

両岸に点在する茂みの所々には、白壁に赤や緑の屋根の積木の様な家々。

市街地の外れには草原が広がり、地平線には平らな丘陵が連らなっている。

（ダブらせて次のナレーション）

ラトガース大学付属グラマー・スクールでの一年は、瞬く間に過ぎて行った。

ここでも、日本人留学生日下部太郎の勤勉で、真摯な姿は衆目を集める事となった。ラトガース大学理学科の学生で、付属校教官ウイリアム・エリオット・グリフィスは、そうした太郎の二歳年上の、厳しい師であり、温かい友人であった。

○グリフィス家のテラス

芝生の庭、周りに野薔薇が咲いている。

テラスに木漏れ陽が注いでいる。

テーブルを囲むグリフィス、母ヘス、姉マーガレットそして太郎。

グリフィス「太郎ヨク来テクレマシタ。急ナ誘イダッタノニ」

太郎「とんでもありません。お招き心から感謝致します」

グリフィス「『息子ノ日本ノ友人ニ会エテ、トテ

モ嬉シイ』母ガソウ言ッテイマス」

ヘス、マーガレットと握手を交わす太郎

マーガレット「ドウゾオ座リ下サイ。Mr・日下部

…グリフィスから聞キマシタ。グラマー・スクール一年デ、大学二年ニ編入シタソウデスネ。スバラシイ事デス」

太郎「有り難うございます。グリフィス先生のお陰です」

グリフィス「太郎ノ英語、トテモヨク学習シテアリマシタ。貴方ノソノ努力ト結果ヲ大学ガ認メタノデス。…Mr・沼川、貴方ノ日本ノ友人モ頑張ッテイマスネ」

太郎「はい。でも…折角ここで再会できたのに、兄の佐太郎君が、ニューヨークのカレッジへ行く事になって…」

マーガレット「アナタ大学デ、何専攻シマスカ」

太郎「日本に戻って役立つ事を、できるだけ多く…はい。理学科で、…専門学科で少し不安ですが」

グリフィス「太郎ナラ大丈夫デス。タダ、無理シ

テハ駄目デス。…数学、物理、生物、化学ナド、自然科学ノ基礎カラ始メタラ良イデショウ」

太郎「はい。グリフィス先生。これからこそよろしくお願い致します」

グリフィス「ソレ駄目デス。私ハモウ先生ト違イマス。二年先輩ノ理学科ノ学友デス」

マーガレット「ソウデス。Mr．日下部、貴方グリフィスノ外国ノ大切ナ友達デス」

太郎「そう言っていただけるのは、とても、うれしい事です。でも、私には、やはり一番身近な先生です」

席を外し、かなり後退りしてグリフィスに一礼する太郎。

マーガレット「…ドウシタノデスカ。何デスカ」

グリフィス「…太郎。ソレ、モシカ、日本ノ教エノ…ソウ、『三歩下ガッテ師ノ影ヲ踏マズ』アレデスカ。ソレ、東洋ノ良イ習慣ト思イマスガ、少シ不便デス。ソレデハ一緒ニ歩ケマセン…」

グリフィスの説明で、笑い出すヘスとマーガレット。

マーガレット「Mr、日下部。…着物ヨク似合イマスネ」

太郎「今日はお招き頂いたので、久し振りに着てみました。母が仕立ててくれた物です。…あっ。忘れていました。…大変失礼しました。…これ、先日届いた物ですが…」

太郎、袂から二柄の扇子を取り出し、ヘスとマーガレットに手渡す。

マーガレット「素敵デス。美シイデス。…日本ノ花デスネ。ドウモ有リ難ウ」

ヘス、珍しそうにマーガレットの絵柄と見比べている。

太郎「お母さんの扇子には、秋の七草。お姉さんの方には、春の七草が描かれています。『舞い』の大切な道具です。…部屋に飾って鑑賞したりもします」

グリフィスの説明に聞き入る二人。

グリフィス「母サン、姉サン。日本ノ人ハ、自然ノ変化、トテモ良ク感ジマス。大事ニ思イマス。…日本ノ文化、そノ事ニ深ク関係シテイマス。…太郎、貴方コソ私ノ先生ニナッテ、日本ノ事、モッと教エテ下サイ。ヨロシク…」

マーガレット「話モイイデスガ、Mr、日下部、私ノ作ッタ料理オイシイデス。ハヤク食べテ、…召シ…上ガッテ下サイ」

にこやかに、太郎にワインを注ぐへス。

○ラトガース大学・正門

赤煉瓦の校門。

RUTGERS-COLLEGEのレリーフ板が架けられている。

○同構内

黄ばみ始めている構内の樹々。

白枠に縁取られたガラス窓。

煉瓦造りの重厚な学舎が並んでいる。

○同　小教室

「幾何」の授業。

板書されている図形の前に立ち、整然と解いていく太郎。

感嘆の視線で見つめる受講生。

教官もしきりに頷いている。

○同　図書館・閲覧室

室内に数人の学生。

窓際の席で調べものをしている太郎。

机上に積まれた数冊の書物。

一行一行指でなぞりながら、読み進めている太郎。いつの間にか太郎ただ一人。

○同　生物学講義室

教室の前後にガラス張りの標本棚。

教卓前に人体模型が置かれている。

一人の受講生が説明を終え自席につく。

次いで、教官に指名される太郎。

指示棒を受け取り、教官の質問に応じ、人体の臓器の部分を指し示している。

○同　化学実験室

板書されている化学方程式。

教卓には、ビーカーやフラスコ、液の入った幾本もの試験管が置かれている。

机上で、試算を繰り返しながら、慎重に試験管に液を注いでいる太郎。

机間巡視の教官が立ち止まり、太郎の仕草を見て軽く肩を叩いていく。

○同　図書館・閲覧室

閲覧室に人影は見当たらない。

窓側のいつもの席、太郎だけが一人残っている。

近づく職員。自分の時計を示しながら、ドアの方角を指さしている。

しぶしぶ、風呂敷にノートなど片づけ始める太郎。

苦笑いする図書館職員。

○市街地・カフェテラス

雨上がりの街路。

ひと枝に幾つもの実をつけているマロニエの樹々。

傍らの丸いテーブルを囲んで談笑している幾組みかの客。

グリフィスと太郎の隣の席に、人形を抱えた四、五歳の幼女とその母親。

幼女もの珍しげに太郎を眺めている。

笑みを返す太郎。

太郎「街路樹素敵ですね。…特に、雨上がりは格別です」

グリフィス「…亡クナッタ父モ好キデシタ。『コノ通リノ、マロニエ、ハ、昔、ドイツカラ移植サレタモノダ』父ガ、イツカソウ話シテクレマシタ」

太郎「ドイツから…そう言えば、ここの地名は、英国のジョージ一世がドイツのニュ

ーブランズウイック公であった事から一八一六年に名付けられたとか…」

グリフィス「ソウデス。相変ワラズ熱心デスネ。市ノ歴史マデ調べマシタカ」

太郎「いやそんな…それより、この間は本当にご馳走様でした。姉上の手料理すばらしかったです」

グリフィス「ソレ、日本式ノオ世辞デスカ」

太郎「いいえ。本当においしかったです。…それに、とても…楽しかった…」

グリフィス「…ヨロシイ。私モ同感デス。…太郎マタ来テクダサイ。母モ姉モ大歓迎デショウ。…トコロデ、太郎、大学ハドウデスカ」

太郎「大変ですが、今のところは理解できます。ただ、毎日図書館通いです。…時間が足りずに困っています」

グリフィス「…評判ニナッテイマス。太郎ガイツモ最後ノ学生ダト。…ソウデス。私カラ一度頼ンデミマス。キット、持チ出シデ

キルモノモ有ル筈デス」

太郎「助かります。是非お願いします」

グリフィス「…太郎。私、来年卒業シタラ、ココノ神学校へ行ク事ニシマシタ」

太郎「神学校へ。…牧師さんの学校ですね」

グリフィス「ソウデス。前カラ考エテイマシタ」

太郎「…牧師さんには、教会の務めの他に、布教の仕事も有りますね」

グリフィス「ソレハ、マダ先ノ事デス。…」

太郎「貴方がたの教団が信ずる神の教えを説くのですね」

グリフィス「ソレハソウデスガ、タダ聖書ダケヲ伝エレバ良イト言ウ訳デハアリマセン。布教先ノ人達ノ心ノ支エニナレルタメニハ、先ズ日々ノ生活ノ中デ、牧師自身ガ役立ツ事ガ大切デス。ソノ行為ヲ通シテ、ソノ行為ノ基ニナッテイル神ノ教エニ気ヅイテモラウ事ダト思イマス…」

太郎「…そうですね。本当にそう思います」

グリフィス「その時ニ、今マデノ知識ヤ技術ガ」

太郎「役に立のですね。…役立たせるのですね…」

隣の席で、突然短い悲鳴。

転がり落ちている人形。

親子を見据え、黒の野犬が低い唸り声を発している。怯えきっているいる親子。

太郎、椅子の背に掛けてあった洋傘を手に、野犬の前に立ちはだかる。

一段と高く唸る野犬。今にも飛びかからんばかり。

太郎、洋傘を上段に構え、裂帛の気合いで振り下ろす。野犬唸り声を弱めて、すごすごと街路へ去る。

人形を拾い上げ幼女に手渡す太郎。

幾度も頭を下げる母親。

グリフィス「太郎。勇気有リマス。立派デス」

太郎「いいえ。実は、犬は苦手で恐かったのです。ただ、目前で、レディの災難でしたから、つい夢中でした。…尤も、レディにしては随分と幼いレディでしたが」

笑い出すグリフィス。

○ 市街地の公園・噴水前

噴水の周りの水槽に氷が張っている。

ベンチ前の歩道の端に、朽ちた落ち葉が溜まっている。

襟を立てて通り過ぎる人、人。

○ 同 噴水前のベンチ

公園の木々が若芽を吹いている。

教会の塔の上高く、白い雲がゆったりと動いていく。

ベンチに腰を下ろし、話し込んでいる沼川三郎と太郎。

太郎「何ですって、小楠先生が、先生が……亡くなられた……」

沼川「この、一月……御所から戻る折だったそうです。……駕籠が襲われたのです。……」

太郎「私には、とても、その様な事信じられません。で、誰が……」

沼川「しかとは分かりません。…旧弊に凝り固まった志士の仕業とか。無念です」

太郎「私とて同じです。…先の、父の便りでは、昨年、御代も明治と改まり、春嶽公が新政府の議定、小楠先生と三岡先生も揃って徴士参与とかいう重要な役職に就かれてご活躍との事で、いよいよと喜んでおりましたのに…」

沼川「日下部さん。とにかく私は一度、帰国したいと思います。兄はどうしても戻れません。…機を得て、必ず、必ず立ち戻って参ります」

太郎「残念です。…折角この地で再会し、この秋からは、大学で一緒にと思っておりましたのに」

沼川「無念ですが…仕方ありません…」

太郎「…長崎でお世話になりながら、…三郎君。…今の私は、何の手助けも叶わずお許し下さい」

太郎、内ポケットから財布を取り出し、

数枚の紙幣を三郎に渡そうとする。

沼川「とんでもない。日下部さん。…ここでの暮らしが大変な事、私も身にしみています。頂けません」

太郎「大丈夫です。少々遅れる事はあっても藩からも、父からも仕送りはありますから、…せめて、食事代の足しなりとして下さい」

太郎、なおも辞退する三郎に、強引に手渡す。おしいただく三郎。

太郎「それより、気を強く持って無事帰国を果たして下さい。…そして、再びお会いできる事を念じています。…横井太平君として」

沼川「…日下部さん」

両手をがっしりと握り合う二人。

○下宿先の部屋

部屋の隅に粗末なベット。整頓よく畳まれている寝具。

窓際に机。机上に幾冊もの洋書。

ランプの下、何度も何度も辞書を繰りながらペンを走らせる太郎。

窓ガラスの外は満天の星。

○ラリタン川に架かる橋の上

川面に、葉を落とした岸辺の灌木の影が映っている。

川の流れを見つめる太郎。

手に巻紙が握られている。

（手紙を書く郡右衛門と○・Lさせて）

父の声「…異国の地で励みしそなたに、かくも女々しき文送る事、重々許され度候。父この三月、藩の改革にて、その御役目を免じられて候。尤も、かく仕儀当藩のみに有らず他藩も同様と聞き及び候。唯、新政府にての改革、定まりし折は、再び仕官の儀、噂にては有れど、風聞にて当てに致すまじく候。…さて、唯々悲しむべき事、これ有り候。過ぐる二月、次郎、

三郎風邪が元にて相次いで身罷りて候。母じゃも心痛これ極まり、今も臥せる有様にて候。父も一心に看護仕れども、日々これ心許なく存じ居り候。…そなたの志を思わば、はなはだ未練がましき言い様なれど、事の実を上げ…一日も早く帰朝あらん事、願い申し上げ候…」

唇を噛み締め、拳を握りしめる太郎。やがて、彼方の空に向かって両手を合わせている。

○大学・食堂

学生達、楽しげに語りながらランチ。

一人の学生、調理場と仕切りのカウンターで硬貨と引き換えに、ステーキの皿とパン、牛乳などを受け取っていく。

太郎、オムレツの皿を指さすが、ポケットを探り、思い直した様にスープとパンをトーレに受け取り空いている席へ。

○下宿先の部屋

ランプに灯が入っている。

パンを噛り、合間に紅茶を口にしながら机に向かっている太郎。

時折咳き込んでいる。

窓の外は暗闇。遠くに人家の灯が二つ、三つ微かに瞬いている。

○同　下宿先の部屋

膝に毛布を掛け、机にうつ伏せになっている太郎。

窓の外、周りの風景がぼんやりと浮かびあがっている。

○大学図書館・閲覧室

調べものをしている太郎。

突然激しく咳き込む。と同時に吐血。急いでハンケチで拭うが、再び咳き込む。

職員が目敏く目にして、駆けつけ、抱える様に館外へ連れ出していく。

○ニューブランズウイック病院・個室

ベットに半身起き上がり、読書の太郎。ノックとともに、入ってくるグリフィス看護婦と看護婦。看護婦の険しい表情。

看護婦「ホラ、言ッタトオリデショウ。マタ読デイマス。私ノ言ウ事、全然聞イテクレマセン」

太郎「ああ、グリフィス。再々のお見舞い済みません。…教会の仕事忙しいですか」

グリフィス「大学ノ講義モ少シ手伝ッテイマスカラ。ソンナ事ヨリ、太郎。コノ人ノ言ウ事聞キナサイ。…本ナド、体ガ直ッタライクラデモ読メマス」

グリフィスはかりに、本を取り上げる看護婦。

太郎「今日は、とても気分が良いのです。…それに、物理の残りのレポート仕上げねばなりません」

グリフィス「駄目デス。…体ガ第一デス。…ソレニ物理ノ教官言ッテイマシタ。太郎ハ、

今マデニ提出シタ分デ十分合格デス。無理絶対イケマセン」

太郎「はい。…グリフィス先生…」

看護婦「グリフィス先生。今度彼ガ約束破ッタラ、私、本全部シマイマス」

グリフィス「ソウデス。ソウシテ下サイ。イイデスネ。太郎」

太郎「はい。グリフィス神父さん」

○同　個室

仰向きになったまま、書物を読む太郎。時折、体を横にして用紙に何か書き込んでいく。

咳の度に苦痛の表情。

○同　病棟廊下

ワゴンに各室の食事が用意されている。

○同　個室

看護婦、ベットの際にかがんで、食べ物

を太郎の口に運ぶが受け付けない。

再度のすすめで、一口、二口スープを含むが、後は静かに目を閉じたまま。

○同　病棟医務室

担当医とグリフィス。その暗い表情。

グリフィス「先生。…ソンナニ悪イノデスカ」

担当医「ハイ。…残念デスガ、…奇蹟ヲ祈ッテ上ゲテクダサイ。…私ドモモ、神ガ、彼ヲオ召シニナル、ソノ最期ノ時マデ、全力ヲ尽シマス…」

グリフィス「先生。…」

○同　玄関口

小走りで駆け込んでくるグリフィス。

○同　個室

太郎の病床を囲んで、グリフィス、担当医、看護婦。

何か告げようとする太郎。

グリフィス「太郎、何デスカ。…何ガ言イタイノデスカ…」

太郎「グリフィス。…卒業を…目の前に、悔しいです。…私は、弱虫です」

グリフィス「ソンナ事アルモノデスカ。…太郎、君ノ頑張リハ…」

太郎「…貴方を日本へ…案内したかった。私の故郷も…見て…もらいたかった…」

グリフィス「分カッテイマス。…ソノタメニハ、太郎ガ元気ニ…イイデス。モウ、話シテ

ハイケマセン」

太郎「私には…分かります。…時が…来ている事…グリフィス先生…有り難う。…すばらしい…思い出…あ、り、がとう…」

太郎の声「父上、母上、お許し下さい。太郎は戻ります。父上、母上の元へ…福井へ戻ります」

閉じられた太郎の両眼から、ひと一条の涙が頬を伝っている。

十字を切るグリフィス。

79 ～86

黙礼する担当医と看護婦。

（O・L）

○ウイロー・グローブ・セミタリ（墓地）

新緑の柳の木立ち。

日本人留学生の六基の墓標。

一番端の墓標に花束を添えている三人。

グリフィス牧師。

その母ヘスと姉のマーガレット。

深い祈りを捧げる三人。

（F・O）

○ニューブランズウイック市（俯瞰）

ラトガース大学の学舎

（ダブらせて、次のサブタイトル）

日本人留学生　日下部太郎

明治三年（一八七〇）四月十三日

アメリカ合衆国

ニューブランズウイック市にて没す

享年二十六歳

○ラトガース大学構内

色づき始めた構内の樹々。

行き交う幾組みもの学生達。

牧師の装いで並木路を行くグリフィス。

すれ違う学生に、時折にこやかに会釈を返している。

角を曲がり、とある建物に入っていく。

○付属校・校長室

テーブルを挟んで、ライリー校長とグリフィス。

ライリー「司教は、お変わりないですか」

グリフィス「はい、お元気にしておられます。先生もお元気でなによりです」

ライリー「ありがとう。…ところで、グリフィス君。今日は是非君に話したい、いや、お願いしたい事があってね」

グリフィス「お願いだなんて、先生」

ライリー「まあまあ、この手紙を一度読んでみてほしい」

手紙を渡すライリー校長。

読み進むにつれ、次第に緊張した表情。

読み終えてグリフィス。

グリフィス「先生。これ……」

ライリー「うん、私の旧友で、日本の東京で工芸大学の教授をしているフルベッキー氏からの便りです。そう、長崎にいた時には、日下部君や伊勢、沼川君なども彼の所で学んでいた筈です」

グリフィス「フルベッキー先生。はい。太郎から何度か聞いた事があります」

ライリー「うん、そこに書いてあるように、彼を通して君を名指しで、招聘の依頼です。全く突然の事で驚いたでしょうが、一度考慮してみてくれませんか」

グリフィス「はい。いいえ、唯々驚きです。太郎の故郷からだなんて」

ライリー「君の事が日下部君を介して、彼の故郷の人達、福井藩の人に伝わっていたのでしょう。グリフィス君、私はうれしい。

君という人物が立派に評価された事、国境を越えて君が必要とされている事、私はうれしい」

手紙を再度読み返しているグリフィス。

ライリー「どうです。真剣に考えてみて下さい。司教には、私の方から頼んでみます」

グリフィス「はい。…太郎の国、太郎の…」

ライリー「何か、…」

グリフィス「いいえ、…はい、早速家族の者とも相談いたします」

ライリー「そうして下さい。君の勇気ある決断を待っています。グリフィス君」

○市街地のカフェテラス

マロニエの木陰。

路傍近くの席にグリフィス。

ウエートレスがコーヒーをテーブルに。

気づかず静思しているグリフィス。

○大学図書館・閲覧室

グリフィスの横に幾冊もの本。

開かれている本のページには、日本の略図。城や武士、商家、町人等の挿絵。

食い入る様に説明を読むグリフィス。

○グリフィスの部屋

本棚から、何冊もの専門書を選び出していくグリフィス。

○ウイロ・グローブ・セミタリ（墓地）

日下部太郎の墓標の前に花束を供え、佇むグリフィス。（台座のRUTGERS－COLLEGE，MEMBER OF F・B・Kの文字が大写しされる。）

墓標に一礼して立ち去るグリフィス。

○市街地の教会

教会横の大銀杏が葉を散らしている。

教会正面の扉が開かれ、老若男女幾組みもの家族が次々と出てくる。

○教会・礼拝堂

最前列の席に居残っているグリフィスと母ヘス、姉マーガレット。

ヘス「グリフィス、打ち明けてみなさい。…貴方がこのところ思いつめている事、話してみなさい」

グリフィス「心配かけて済みません。…グラマースクールのライリー校長に、…実は、二週間程前、呼ばれて…」

ヘス「ライリー校長先生に、…何んですか。教会の事ですか」

グリフィス「いいえ、それが…思いがけないお話でした。『日本へ行かないか。専門の理学を教えながら、彼の地の教育の手助けをしてみないか。』とおっしゃるのです。先生の旧友で、日本のカレッジにおられるフルベッキー先生のご紹介です」

マーガレット「まあ、日本へですって」

グリフィス「母さん、姉さん。…それが…太郎の故郷、福井藩の招きなのです」

マーガレット「Mr、日下部の故郷へ」

ヘス「それで…グリフィス、どうなんです。…貴方の事です。もう、決心はついているのでしょう。私には分かります。聞かせて下さい」

グリフィス「はい、母さん。…私は、決心しました。日本へ行く事にしました。…私の学んだ理学の知識や技術が役立つなら、それは、うれしい事です。人の為に何か役に立つ、それは、私が生涯を捧げようとした教会の仕事と同じだと思ったからです」

マーガレット「その通りです。グリフィス。私が貴方の立場でも、多分同じ結論になったでしょう」

グリフィス「有り難う姉さん。それに、今度の事は、福井藩の人が、太郎の事を通して、私を必要としてくれたからなのです。困難な事も多いでしょうが、後悔はしないつもりです」

ヘス「そうです。グリフィス。…神は、貴方をお守り下さいます。貴方は、真理の言葉を持って行くのです。…私達の事は、心配いりません」

グリフィス「有り難う。…母さん」

マーガレット「グリフィス。貴方のすばらしい決断に、神の祝福有るようお祈りしましょう。さあ…」

三人、祭壇前にひざまずき、深い祈りを捧げる。

長窓のステンドグラスを透かして三人の頭上に穏やかな陽光。

慈愛に満ちたマリヤ像。

I

○大平原を行く列車

地平線から陽が昇る。

平原のあちこちに赤茶けたロックヒル。

地平線の黒い一点が少しずつ大きくなってくる。

客車の後に貨車も連結した列車。

○ 渓谷を行く列車

セコイアの森林の渓谷を縫うようにして進む列車。

麓には、岩を噛み、飛沫を上げ流れ下る激流。

○ 同　列車内

列車の中程、窓側の座席にグリフィス。膝の上にトランクを置き、小さなケースを取り出す。

蓋を開けると、それは、『金の鍵』。

車窓に目を凝らすグリフィス。

○ サンフランシスコ市街

市街地の急な坂道。

下り切って視界が広まると、半島に深く抱かれた入り江。

停泊する幾隻もの蒸気船、帆船。（背景に次のサブタイトル）

「十二月一日　サンフランシスコ出航」

○ 船室・個室

備え付けの机に向かい、調べものをしていグリフィス。

丸いガラス窓の外は、水平線が上下して見えている。

○ 甲板

空と海と区別もつかぬ洋々たる海原。

デッキに出ているグリフィス。

大きく、胸いっぱい大気を吸い込む。

時々波飛沫がデッキに。

○ 同　甲板

おだやかな洋上。

突き出た陸地に沿って進む船。

連なる山々の稜線の彼方には、荘厳な富士の雄姿。（背景に次のサブタイトル）

「十二月二十九日　横浜港到着」

○福井藩江戸屋敷・居間

床の間には、迎春の飾り物。

堀多門（大御番頭）

中村慎吾（大番組詰・通詞）と対座する

グリフィス。

グリフィス胡座をかいて座っている。

中村「一ツ、明新館ニテ主ニ化学、物理の教授ニ当タル。一ツ、月給ハ、三百ドルヲ支払ウモノトスル。一ツ、藩ハ住居トシテ、洋館ヲ早急ニ用意スル。一ツ、期限ハ、三カ年ヲ目途トスル。……以上、契約書ガ定メル十三項ノ肝要ナ所ヲ、今一度説明サセテイタダキマシタ。コノ際特ニ、オ尋ねハ……」

グリフィス「細カイ所マデ配慮イタダイテ、良ク分カリマシタ。十分デス」

堀「今後の事は、この者を通して申し出下さる様に」

中村「コレカラノ事ハ、何ナリト私ニオ申シ出下サイ」

グリフィス「有リ難ウゴザイマス。デ、福井ヘハイツ出発スルノデスカ」

堀に、伺いを立てる中村。

堀「何分にも、遠路お疲れの上、国表の都合もござれば、出立は二月上旬と相成ります。それまでは、この藩邸にて休養の程を。なお、国表へはこの中村が同道致します」

中村「当分ハ、長旅ノオ疲レヲ取ッテ頂キマス。準備ガ必要ナノデ、出発ハ二月ニ入ッテカラニナリマス。福井ヘハ私ガゴ案内致シマス」

グリフィス「オ心遣イ感謝シマス。Mr.中村ヨロシクオ願イシマス」

堀「国元では、殿をはじめ、重役の方々、大きな期待を以て、貴殿をお待ちの事と存じます」

中村「殿様ハジメ、ゴ重役、藩校ノ方々ガ、先生ノオ越シヲ待ッテオラレマス」

グリフィス「ハイ。Mr日下部ノ成シタカッタ事

ヲ心コメテ致スツモリデス。」

通訳する中村。

感じ入った様子で黙礼する堀。

微笑を返すグリフィス。

中村の仕草を真似て、茶を口にするが、

瞬時表情を歪め、一気に飲み干す。

グリフィス「結構ナ、…飲物…デシタ。」

顔を見合わせ笑う堀と中村。

つられて笑うグリフィス。

○福井への道中

（画面上部の旅程〔地名〕と道中の一行、情景をダブらせて。）

江戸

藩邸を出立する一行。

駕籠を前後に数人の騎上の武士と数頭の荷駄。先頭に中村。

（以下、大津・木の芽峠・府中は同じ）

横浜

船に乗り込む一行。

神戸　下船する一行。

大阪　大坂城（以下、京都・琵琶湖々上・敦賀は情景のみ）

京都　八坂神社　清水寺の塔。

大津　膳所の湖岸を行く一行。

琵琶湖々上　浮見堂・竹生島。

敦賀　半島の入り江、波涛が岩礁に砕けている。

木の芽峠　九十九折の狭い街道。雪が残っている。進む一行。

府中　旅籠に到着する一行

○府中・旅籠の部屋　夜

丹前姿で寛ぐグリフィス。中村が同席し

ている。

中村「先生、本当にお疲れでしょう」

グリフィス「ハイ、…駕籠ガ私ニハ少シ窮屈デ、ナカナカ慣レズ、…馬ノ方ガ、イヤ…ソレモ私ノ為ニ用意シテ下サッタ事デスカラ。」

中村「恐縮です。…先生、いよいよ明日は、福井です。遅くともタ刻前には」

グリフィス「ソウデスカ。着クノデスカ」

中村「はい。ああ、それから、先刻藩の方から使いの者が参り、明後日藩庁にて、殿並び重役とのご対面との事」

グリフィス「分カリマシタ。真ッ先ニ日下部ノ事、私ヲ招イテ下サッタオ礼ヲ言イタイト思ッテオリマス」

中村「それは皆様きっと感じ入られる事と存じます。…先生、宵…、雛の節句、この宿にも立派な雛が飾られております。ご覧になりますか」

グリフィス「…雛ノ節句。…女ノ子供達ノオ祝イ

太郎カラ聞イテイマス。ハイ、是非見セテイタダキマス。」

○同　旅籠・大広間

七十餘人の雪洞に華やいだ顔を寄せるグリフィス

グリフィス「ゴ馳走様デシタ。コノ宿の者が、遠慮気味に差し出す雛あられを一つずつ丁寧に口にする。クッキー色ガトテモキレイデス」

中村「先生、これは『霰』と言います」

グリフィス「アラレデスカ」

中村「そうです。形が、冬空から降るあの…ヘイルに似ているので…」

グリフィス「オオ、ヘイル。分カリマス。オ菓子ノ名前ニ、カワイイデス。Mr. 中村、マタ一ツ勉強シマシタ。アリガトウ」

○同　旅籠前

出立前の一行。大きく背伸びをして、膝を曲げて駕籠に乗り込むグリフィス。

宿の者の見送る中、中村の合図で出立していく一行。

○福井城下・郊外の街道

路傍には残雪。

猫柳が芽を吹いている。

駕籠に駒を寄せる中村。

中村「グリフィス先生、福井が見えましてございます。」

駕籠を出るグリフィス。

低く垂れ込めていた灰色の雲が切れて、幾筋もの陽光が降り注ぐ。

城の白い築地と三重の櫓、城下の家並みが、茜色の空の下くっきりと映し出されている。

中村「福井の城下です。グリフィス先生」

グリフィス「アソコガ福井、太郎ノ故郷デスカ。太郎、私はトウトウ来マシタ。…貴方ノ生マレタ、育ッタ、学ンダ福井ニ、私ハコウシテヤッテ来マシタ」

○宿舎・グリフィスの執務室

洋式の執務室。椅子にもたれ瞑目しているグリフィス。

入って来る執事。

執事「藩庁での接見、如何でしたか」

グリフィス「ハイ。松平藩知事ハジメ皆サンカラ心ノコモッタオ礼ト期待ノ言葉ヲイタダキマシタ」

執事「それはようございました。ところで先生、日下部寿殿が……」

グリフィス「オオ、日下部、早ク早クオ通シシテ下サイ」

低頭し、腰を屈めて入って来る八木寿。真っ白の頭髪、生気の欠けた表情の寿。

グリフィス「日下部太郎君ノオ父サンデスネ。……私ガグリフィスです。ヤット、オ会イデキマシタ……」

寿「仲の先生の、……お世話になった……」

グリフィス「オ父サン。頭ヲ上ゲテ下サイ。……

確カニ日下部君ハ、一時私ノ大事ナ生徒デシタ。…デモソレ以上ニ彼ハ、私ノ大切ナ大切ナ、尊敬スル友デシタ。私ハ彼カラ沢山ノ事ヲ学ビマシタ。」

寿「先生……」

グリフィス「日下部ハ、オ父サンノ手紙悩ミマシタ。彼ハ、トテモ心ノ優シイ人デス。家族ノ事ヲ心配デナイ筈アリマセン。シカシ、彼ハソレ以上ニ彼ノ志ニ責任ヲ感ジテイタノデス。」

寿「グリフィス先生……」

グリフィス「彼ノ努力、私ダケデナク、大学モ高ク認メマシタ」

机上のビロードのケースを手にして、

グリフィス「オ父サン、コレハ、ラトガース大学ノ、ファイ・ベータ・協会カラ預カッテキタ『金ノ鍵』デス。コレハ、学業人物共ニ特ニ秀デタ者ニ授与サレル物デス。彼ハ最後マデ首席デシタ。卒業モ認メラレマシタ。…オ父サン、サアオ受ケ取リ

下サイ」

寿の両手に、しっかりと記章を握らせる

グリフィス。

額までも捧げ、記章を受け取る寿。

寿「…太郎の亡くなった母親も、きっと…喜んでくれます。先生…」

グリフィス「オ父サン、日下部ハ、イヤ、太郎ハ、全テニスバラシイ人デシタ。最後マデ意志ヲ貫キマシタ。…彼ノ過チハタダ一ツ、ソンナニモ早ク逝ッタ事デス。」

必死に堪える寿。

寿「…先生…」

グリフィス「私ハ、太郎ノ志ヲ伝エルタメニ、太郎ガ成シタカッタ事ヲ成スタメニ、ココニ来マシタ。…私ヲ外国人ノ太郎ダト思ッテ元気出シテ下サイ。ソレカラ明日ニデモオ母サンノ所案内シテ下サイ。ゴ冥福ヲ祈リ、太郎ノ事報告シタイデス。」

寿「グリフィス先生……」

グリフィスの手を握り締める寿。

堪え切れずに嗚咽する寿。

その肩を優しく抱くグリフィス。

「翌、三月七日　グリフィス早くも明新館で授業を開始」（サブタイトル）

○明新館・教場

三十人程の門弟が、興味津々グリフィスの片言の日本語の話に聞き入っている。

グリフィス「…ト言ウ訳デ、皆サンノ先輩、Mr.日下部ハ、スバラシイ人デシタ。私ハ、彼ノ友デアッタ事誇リニ思イマス。私ハ彼ガ皆サンニ伝エタカッタ色々ノ事、授業デ教エテイキタイ。文字デ知ル事モ大切、デモ、実際ニ行イ試シテ、分カリ、気ヅキ、納得スル事トテモ重要デス。…私、ソノ為ノ準備、道具作ッテイキタイデス。ソレニ、英語、ドイツ語ナド、外ノ勉強モ、一緒ニシテイキマショウ」

頬を紅潮させて聞き入る門弟達。

○同　教場

教卓を囲んで門弟達。

磁石の実験が行われている。

釘が吸い寄せられる度に歓声が上がる。

グリフィス「コレハ、『マグネット』デス。鉄ヲ吸イ付ケル性質ヲ持ッテイマス。ソノ性質ヲ利用シタノガ、コノ器具デス」

グリフィスから渡された小型の羅針盤を代わる代わる手にしている。

中にはぐるぐる回してみる者もいる。

門弟一「先生、これ、いくら回しても中の針がNという文字を指しています」

グリフィス「ソウデス。ソノ針ハ、磁針ト言ッテマグネットノ性質ガ利用サレテイルノデス。コノ器具ハ、『コンパス』…」

説明を最後まで我慢できずに、

門弟二「先生、この機械は、方角を示す物ですか」

グリフィス「ソウデス。Nハ日本デハ北、Sハ南

ノ事デス」

東西南北のスペルが書かれている半紙を示しながら、説明を続ける。

グリフィス「コレガアレバ、イツデモ、ドコデモ方角ガ確認デキマス。船ナドノ航行デ迷ウ事アリマセン。日本デハ羅針盤ト呼ンデイマス。コレ実ハ、日本ノ平安時代ノ終ワリ頃、宋ノ国デ、既ニ発明サレテマシタ。知ッテマシタカ。シカシ、詳シイ原理ハ、モット他ノ勉強必要デス」

ただ沈黙して聞き入る門弟達。

○同　教場

アメリカ合衆国の略図を広げ、説明しているグリフィス。

イギリス、独立、ワシントン、南北戦争リンカーンなどの言葉が聞き取れる。

○グリフィスの宿舎・夜

リビングルームに幾人かの門弟。

テーブルの上には、ドイツ語の発音を記したカード。

一枚一枚取り上げ、丁寧に発音させているグリフィス。

○

城下・足羽川の河原

川原の岩石、小石をハンマーで割り、細々と説明しているグリフィス。

説明を聞き終え川原に分かれてる門弟。

半紙に岩石の断面を書き写している者もいる。

○

同・川原の堤

地表の露出した所で、地層の説明をしているグリフィス。

○

グリフィスの宿舎・夜

グリフィスを囲んで英会話を習っている数人の門弟。

壮年の武士も混じっている。

お互いで、会話文を交わし合っている。

その一組を咎めて、

グリフィス「ダメデス。質問ノ形ニナッテイマセン。基本ノ型ヲ間違ッテ使ッテハイケマセン。分カッタツモリデ答エテモイケマセン。ソレヲ学習トハ言イマセン。イイデスカ？」

門弟達「はい」

グリフィス「理解デキナイ事ハ、遠慮イリマセン。何度デモ質問シナサイ。ソレ、恥ズカシイ事アリマセン。分カッタ振リスル事、コレ、恥ズカシイ事デス」

門弟達「はい。先生」

グリフィス「ヨロシイ。続ケマショウ」

○明新館・玄関前

大八車が横付けされている。

門弟達が嬉々として、積み荷を学舎に運び入れている。

○同　教場

運び込まれた荷を解く執事と門弟。

理科実験器具、岩石標本、薬品などが、床に整頓されていく。

ガラスの戸棚に、一つ一つ労る様に納めていくグリフィス。

○武家屋敷の道・盛夏

築地越し、鮮やかな松の緑。

石畳の道も乾いている。

そこかしこに油蝉の声。

グリフィスと肩を並べていく中村。

中村「折角お休みのところをお誘いして」

グリフィス「イイエ、私モ見テオキタイデス」

中村「八月半ばには、お入りいただけるでしょう。なにしろ初めての西洋館と言う事で、大変な評判です」

グリフィス「皆サン、トテモ親切デ、今ノ所デモ不自由ハナイノデスガ」

道場帰りの門弟らしき若者が、立ち止ま

って、しっかりと挨拶を交わしていく。

中村「先生、それにしても大変なお働きで、感服しています」

グリフィス「イヤ、毎日気ゼワシク、何事モ思イツキデ、門弟ノ皆サンモ困ッテイルノデハナイデスカ」

中村「何を仰いますか。彼らは皆先生の熱意に、もう、目の色を変えて励んでいます藩の重役の方も大変なお喜びで」

グリフィス「アリガタイ事デス。……アア、ソウデス。中村サン。貴方ニオ願イシタイ事アリマス」

中村「私に、何事ですか。私なぞに」

グリフィス「ハイ、中村サン。……私ニ正シイ日本語教エテ下サイ」

中村「日本語を、先生は、今でも十分に話されるじゃありませんか」

グリフィス「駄目デス。私、門弟ノ皆サンニ英語正シク教エテイマス。私モ正シイ日本語学ブ事必要デス。勉強シテ、日本ノ歴史、

文学、芸術ノ事モットモット知リタイデス。中村サン」

中村「本当に先生には、頭が下がります」

グリフィス「頭ガ下ガル。中村サン。貴方ノ頭下ガッテイマセン」

中村「グリフィス先生」

笑いこける二人。

中村「どうですか先生。帰りに拙宅に寄ってタ飯など如何ですか。これと言ったおもてなしはできませんが。母や家内も喜びます。」

グリフィス「アリガトウ。中村さん。…デモ、拙宅デ、モテナシ無シデスカ」

中村「先生…」

大笑いするグリフィス、中村。

○ナレーション

門弟や周囲の人々、藩庁関係者の敬愛と信頼を一身に受けながら、グリフィスは、確実にその成果を上げていった。しかし、

ここに大きな事件が持ち上がってきた。明治四年（一八七一）七月、廃藩置県の令の公布である。グリフィス来藩、僅か十ヵ月目の事であった。

○「十月一日　城内本丸・大広間」のサブタイトル。

○城内本丸・大広間

正面の台座に藩知事松平茂昭、下座両脇に藩重役。百人程の正装の武士が畳に両手をつき、うなだれている。（背景にして、次のナレーション）

その日の有様をグリフィスは、後にその著「皇国」の中で、「朝早くから、かみしも姿の武士が主君に別れを告げるため、城内本丸大広間に続々と集合した。皆両手をついて頭をうなだれていた。それは、その日の、その場所の、意味の大きさにじいっと耐えているようであった。それは、単に主君との別れの気持ちだけ

でなく、彼らの父や祖父、その祖先が三百年に及んで送ってきた武士の生活、そのものへの別れでもあった。どの顔も心細い将来を手探りで求めようとしているかのようであった。…」と述べている。しかし、こうした混乱と戸惑いの中、グリフィスの授業は、年が開けても続けられていった。

○グリフィス宿舎・執務室

窓ぎわに立ち、腕組みを静かに目を閉じているグリフィス。

執事が封書を手にして入って来る。

執事「先生、東京からお手紙です」

立ち去ろうとする執事を呼び止める。

グリフィス「オ話ガアリマス。…少シ、待ッテイテ下サイ」

二通の封書、封を切り読むグリフィス。

不安気に見守る執事。

読み終えるグリフィス。

グリフィス「オ待タセシマシタ。サア、立ッテイナイデオ座リ下サイ。由利公正先生ト東京デ工芸学校ノ教授ヲナサッテイル、フルベッキ先生カラデシタ。ドチラモ、早ク上京シテ、新シイ仕事ヲト言ッテコラレマシタ」

執事「先生、それは良うございました。いや私も、門弟の諸君も、親御さん達も、先生には、いつまでもここにと願ってはおりますが……」

グリフィス「ハイ、私モ同ジ気持チデス。デスカラ今日マデ、ヤッテキマシタ。シカシ、契約主ノ福井藩ガ無クナッテハ……」

執事「はい……」

グリフィス「藩庁ノ方モ、ゴ尽力下サッテイマスガ、コレ以上迷惑カケラレマセン」

執事「本当に……残念です」

グリフィス「私ハ、由利先生、フルベッキ先生ノオ勧メニ従イ上京シヨウト思イマス。実ハ、姉モ今、東京女学校デ教壇ニ立ッ

テイルノデス」

執事「姉上モ、東京ニ」

グリフィス「貴方ニハ、着任依頼、本当ニオ世話ニナリマシタ。今日マデ何トカヤッテコレタノハ、貴方ノオ陰デス。本当ニアリガトウ」

執事「先生。私こそ色々な事を教えていただきました。それより何より先生とお会いできた事が、私の一生の思い出、心の宝物です」

グリフィス「アリガトウ。今度ハ、日本ノ教育ノオ手伝イヲト思ッテイマス」

執事「先生。東京へいかれても、必ずまた福井に来てください」

グリフィス「勿論デス。福井ノ事ハ忘レマセン。太郎ノ事モ、貴方ヤ中村、明新館ノ先生方、ソシテ、アノ熱心ナ青年達ノ事」

目頭を押さえる執事。

懐中時計を渡そうとするグリフィス。

執事「先生。…こんな貴重な物を、先生」

グリフィス　「イイノデス。ソウデス。今度来ルマデ貴方ニ預ケテオクノデス」

執事　「グリフィス先生……」

（サブタイトル）

「明治五年（一八七二）一月十日

グリフィス明新館で最後の授業」

○明新館・教場

門弟達でぎっしり詰まっている教場。

教官達も傍聴している。

教壇のグリフィスを見つめる門弟達。

一言も聞き逃すまいとしている表情。

グリフィス　「……皆サン。本当ニアリガトウ。

私ハ、コノ福井ニ来テ、二ツ大切ナ事ヲ教エラレマシタ。一ツハ、国ト国トノ間ニハ、言語、生活習慣、宗教ナド、大キナ違イガ有リマス。地図上ノ国境ニ次グ、言ワバ第二ノ国境デス。シカシ、学問ノ世界ニ国境ハ無イノデス。モシ、有ルトシタラ、ソレハ、方法・進度ノ違イニ過

ギマセン。学問ノ真実、真理ハ人類ニ共通ノモノ、共有スベキモノナノデス。皆サンガ、授業ヲ通シテ、ソノ事ヲ気ヅカセテクレマシタ。」

門弟達「先生……。」

静かに制し、つづけるグリフィス。

グリフィス「二ツ目ハ、人ハ、コンナニモ、オ互イガ助ケ合ッテイケル。信ジ合ッテイケルトイウ事実デス。コレモ皆サンガ私ニ教エテクレマシタ。ソレハ、私ノコレカラノ新シイ力ニナル事デショウ。……私ハ感謝ノ心デ私ノ神ニ祈リマス。私ヲココヘ導イタ私ノ友、日下部太郎ト皆サン、皆サンノ家族ノ事ヲ……ドウモ、アリガトウゴザイマシタ。」

待っていた様に湧き起こる拍手。

満面の笑みで教壇を下りるグリフィス。

取り囲む門弟達。

○

明新館・校門前

中村通詞、明道館教官、執事、門弟達に
囲まれているグリフィス。
囲みを分けて八木寿。
駆け寄るグリフィス。
無言で頷きながら両手をしっかり握り合
う。
折から、陽光に木々の新雪が輝いている
灰色の雲間には、それでも澄んだ青空が
くっきりと見えている。

（F・O）

○グリフィス、大学南校（東京帝国大学）
にて、化学・物理・精神科学を指導。
（サブタイトル）

○明治七年（一八七四）七月、帰国。
（サブタイトル）

○明治九年（一八七六）「皇国」を出版。
以後、「日本の民話・美術」「日本の宗

教」「日本の諺」等を著し、世界に日本を紹介。

（サタイトル）

○昭和元年（一九二六）十二月、グリフィス、夫人フランシスとともに再来日。爾来の功績により、日本政府より勲三等旭日章を授与さる。

（サブタイトル）

○翌昭和二年（一九二七）四月二十五日グリフィス（八十三歳）五十五年振りに福井を訪ねる。

（サブタイトル）

○福井駅・駅舎正面

駅長に先導されて、駅舎正面口に姿を見せるグリフィス夫妻。続く市助役、福井中学校長達。

待ち構える群衆が、一斉に日の丸と星条旗の小旗を打ち振っている。

○

堀に面した街路

葉桜の並木道。

立ち並ぶ福井中学の教職員と生徒達。

満面に笑みを湛え、人垣を進むグリフィス夫妻。

○

福井中学校・講堂

演壇へ一歩一歩階段を上るグリフィス。

演壇の正面に立つグリイス。

と、突如として生徒たちのアメリカ国歌の大合唱。

感極まって、そっと目頭を押さえる壇上のグリフィス。

○

福井市庁舎・応接室

高い天井。重厚なシャンデリア。

四方は大理石の柱。

アーチ形の明り窓には、純白のカーテン。

床には真紅の絨緞。

漆黒のテーブルを挟んでグリフィス夫妻と市長達。

卓上に幾重ねかの衣装包み。

市長「これは、私どもの、ささやかな感謝のしるしです。…先生には、羽二重の紋付奥様には、友禅のお召しを…どうかお納めください。…きっと、お似合いの事と存じます」

市長がグリフィスに、助役が夫人に品物を手渡す。

グリフィス「ワタシニ似合ウ。…市長サン。ソレ、私ニトッテ、ナニヨリ、ウレシイ言葉デス。大事ニ、大事ニシマス。…アリガトウゴザイマス」

頭上に頂くようにして、着物を受け取るグリフィス夫妻。

拍手で応える同席者達。

○残雪の白山連邦、九頭龍の流れを背景に

そして

その日から

あの激動の

昭和の五十余年が過ぎ

（サブタイトル）

○

一九八二年（昭和五十七）五月

（サブタイトル）

○

姉妹都市盟約書（インサート）

日本国福井県福井市とアメリカ合衆国、ニュージャージ州ニューブランズウイック市とは、日下部太郎とウイリアム・エリオット・グリフィスによる百年を越える友情を契機に、相互に教育、文化、産業、経済の交流を図ると共に、両市の友好を深めることを念願し、ここに、両市が姉妹都市として提携することを盟約する。

一九八二年　五月二十五日

○（「堕涙碑」にダブらせてクレジット・タイトル流れる。）

○キャスト

・八木八十八（日下部太郎）
・同郡右衛門（寿・父）
・同おくま（母）
・同次郎（弟）
・萩野綏江（叔母）
・橋本左内

・三岡八郎（由利公正）
・矢島立軒　明道館幹事
・平沢貢　同教導
・原田市太夫　同外塾学事掛
・柴田大助　長崎済美館教授補
・伊勢左太郎（横井左平太）
・沼川三郎（横井太平・弟）
・堀多門　藩大御番頭
・中村慎吾　同大番組詰・通詞
・長井信輔　明道館の先輩

・佐野良明　同
・道場の高弟
・茶屋の亭主
・宿舎の執事
・榊原数馬　少年時代の朋友
・少年一、二　同
・門弟一、二（明道館）
・塾生一、二（済美館）
・福井市長
・同助役

・福井中学校長
・同教職員
・同生徒
・歓迎の群衆
・グリフィス
・ヘス（グリフィスの母）
・マーガレット（グリフィスの姉）
・フランシス（グリフィスの妻）
・フルベッキー　長崎済美館校長

・ライリー　グラマースクール校長
・大学の教官一、二、三
・受講生、大学の学生
・居留地の中年夫婦
・同老婦人
・病院の担当医
・同看護婦
・図書館職員
・カフェテラスの親子

「堕涙碑」
日下部太郎とグリフィスの胸像レリーフがUPされて……
（完）

◇シーン・プロット◇

福井市立図書館横・記念碑

福井藩城下・八幡宮

同　境内　F・I

城下・足羽川河畔

同・中州

同・岸辺

同・中州

同・岸辺　F・O

八木郡右衛門宅・縁側に面した居間

城下・錬武所

同・道場内

藩校「明道館」・外塾

同・学事掛の部屋

明道館・講堂

同・講義室

江戸城・安政大獄　F・I

江戸・小天馬町獄舎

辞世・朗詠　F・O

福井城・御本丸橋

城内三之丸・明道館への道

明道館・講堂

城内・三之丸橋

郡右衛門宅・おくまの居間

同・廊下

同・おくまの居間

同・八十八の居間

ナレーション1（長崎留学）

郡右衛門宅・中庭

同・座敷

城下足羽川河畔・船着き場

同・堤の茶屋

同・奥の間

足羽川・川面

同・堤

長崎・市街地

長崎・済美館

同・寄宿舎二階の部屋

同・大講義室
同・窓外
同・大教室
同・小教室
同・寄宿舎の部屋
南山手・外人居留地
同・坂道
同・洋館前・大浦天主堂前
眼鏡橋・教会近くの路傍
同・付近の川辺

済美館・校長室
崇福寺・境内
同・開山堂　O・L
ナレーション2（決意・帰郷）
郡右衛門の居間
ナレーション3（長崎第四号・渡米）
長崎湾　F・I ③
ニューブランズウイック市（俯瞰）O・L
ナレーション4（グリフィスとの出会い）

グリフィス家のテラス

ラトガース大学・正門

同・構内

同・小教室

同・図書館・閲覧室

同・生物学講義室

同・化学実験室

同・図書館閲覧室

市街地・カフェテラス

市街地の公園・噴水前

同・噴水前のベンチ

下宿先の部屋

ラリタン川に架かる橋の上

大学食堂

下宿先の部屋・深夜

同・夜明け

大学図書館・閲覧室

ニューブランズウイックの病院

同・個室

同・病棟廊下

同・個室

同・病棟医務室

同・玄関口

同・個室

ウイロー・グロー・ブ・セミタリ

F・O

サブタイトル

大学構内

付属校・校長室

市街地・カフェテラス

大学図書館・閲覧室

グリフィスの部屋

ウイロー・グロー・ブセミタリ

市街地・教会

大平原を行く列車

F・I

溪谷を行く列車

同・列車内

サンフランシスコ市街

サブタイトル

出航

船室・個室

甲板

同・甲板

サブタイトル　横浜入港

福井藩江戸屋敷・広間

福井への道中

府中・旅籠の部屋

同・大広間

同・旅籠前

福井城下・近郊の街道

グリフィスの執務室

サブタイトル　授業開始

明新館・教場

同・教場　磁石

同・教場　歴史

グリフィスの宿舎

城下・足羽川の川原

同・川原の堤

グリフィスの宿舎

明新館・玄関前

武家屋敷の道

ナレーション5（廃藩置県）

城内本丸・大広間

グリフィスの執務室

サブタイトル　最後の授業

明新館・教場

同・校門前　F・O

姉妹都市盟約書（インサート）

クレジット・タイトル

「堕涙碑」　完

福井駅合流点

堀に面した街路

福井中学校講堂

福井市役所応接室